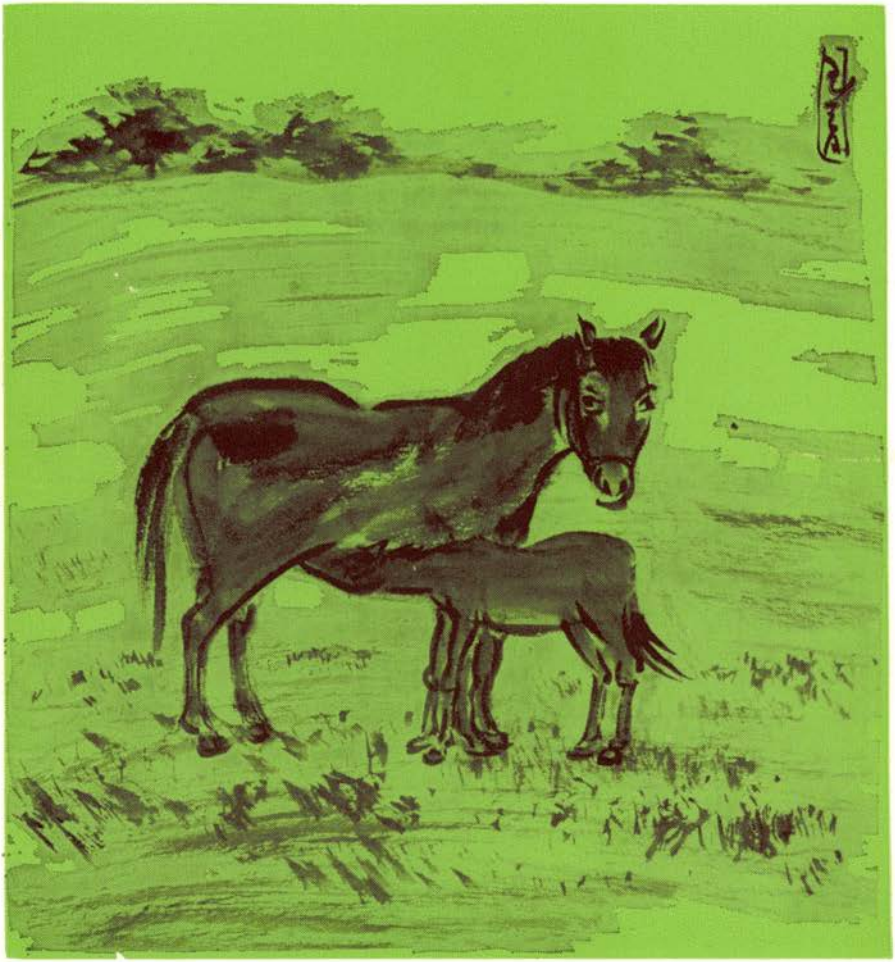
川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和五十一年三月二十五日 印刷
昭和五十一年四月一日 発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻 五八七号



日川協加盟

No. 587

四　月　号

「旅人」以後の

麻生路郎作品（34）

（傍島　静馬）

三十七年十一月号

（不朽洞句帖）

東　上（九句）

京都から来る女性なり和服なり
一人旅のびのびとして鉛筆を削る
一人旅あれも云うとく筈だった
車内案内わさび漬からはじまった
一人旅隣りの週刊誌をのぞき
瓦屋根続く　清の絵の如く
労働は神聖クレーン向きを変え
汽車あとすざりす　遊んでいる如く
流れる雲を　ねたむ山々

香林・若楽を悼む

浄土へつづく箸蔵山の雲迅く

大阪逓信病院川柳会「素顔」

一寸待っててと変な素顔を塗りつぶし

杏林川柳会「どさくさ」

どさくさで今日は牛乳飲み忘れ

南海電鉄川柳会「新車」

副社長の方が新車でご出勤

一番よい酒
うまい酒

清酒
菊正宗

宮内庁御用達
菊正宗酒造株式会社
神戸・灘・御影

はるけくもはるけし金婚の酔えぬ酒

木枯をぬけてわかった狂い咲き

嚙み合わぬままの揉み手で逃げまわり

もの怖じの眼で見返えせば亡母居まし

Kさん全快

家中を喊声で埋め試歩の朝

中島生々庵

巌松無心

「大法輪」三月号に、東大社会心理学の辻村明教授がエッセイを載せて居られる。それによると先生は昔の高僧たちが残したすばらしい禅語を数年来賀状に毎年一つずつわかつことを試み、一昨年は「巌松無心、風来って吟ず」という最も好きな句にした。海岸に突きでた岩に、亭々として聳える松は、風がこない限り、ただじっと立っているだけである。風が吹いてくれば、それに合わせておのずから松籟を奏でるのである。われわれ凡人は、機の熟さないうちに背伸びして、ざわざわと音をたてがちであるが、自戒すべきことである」と書いて居られる。私はさきにこの欄で「日川協」成育に対する祷りや希望について述べたが、この辻村教授の一文に接し何も判らぬ私にも胸を吹きぬける思いがした。勿論「日川協」の話とニュアンスの違いは相当あるとしても「風来って吟ず」の心構えを尊く堅持したいものであると思っている。

川柳塔四月号

座右の句

一日の重さ軽さよ日記帖　（薫風）

私の句

二人四脚夫唱婦随婦唱夫随　柳楽鶴丸

川柳塔　四月号　目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

巌松無心……中島生々庵…（1）
鮎美さんのこと……西尾栞…（2）
誹風柳多留廿五篇研究……（十）……（22）
清博美・八木敬一・紀内恒久・青木迷朗・西原亮
鈴木黄・室山三柳・入江勇・岡田甫
川柳塔（同人作品）……若本多久志選…（4）
水煙抄……川村好郎選…（32）
麻生路郎物語……（16）……東野大八…（24）
秀句鑑賞……（同人吟）……尼緑之助…（30）
……（水煙抄）……高杉鬼遊…（31）
近作……諸家…（39）
百人一首と川柳…（22）……冨士野鞍馬…（40）
愛染帖……正本水客選…（42）
オシャカさまと川柳……戸田古方…（44）
50年度各地柳壇賞決定……若本多久志…（65）

鮎美さんのこと

西尾　栞

去る第二十三回大万川柳大会に於て、第一回大会の、旧い写真を持って行ったら、故人となられた、珍らしい方々の話が出た。その中で鮎美さんの話が出たので、鮎美さんのことを思い出して書いて見よう。

鮎美さんは、人も知る、路郎門の、鮎美、豆秋というコンビで呼ばれた、川雑の逸足であった。

阪神電鉄に勤務されたので、川柳の種を、阪神間に播かれて、すくすくと育てられたことは有名である。鮎美さんと私は不思議な絆をもっている。鮎美さんが育てられた、角一ゴムの、白鷺会（誌名唐辛子）の後を私は一年余り、指導に出向したし、又鮎美さんの指導された、明和病院の青蛙会のあとを、川柳雑誌社明和支部として、受け継いで、毎月明和病院へ私は通った。その時、今活躍中の、薫風氏、牧人氏その他の好作家を知ったのである。

鮎美さんは、何はさておき、お酒が大好きであった。或る時の川柳大会の懇親宴の帰り道、天王寺公園のベンチで、酔いつぶれて寝てしまい、眼が覚めたら、九谷焼の盃を一つ大切に持っていて、朝になっていたという話をきいた。

鮎美さんの、最後の句集「美をぶらす」は昭和三十年十一月に発刊された。

当日私は一升瓶を提げて、阪神電鉄の地下

日米交歓川柳大会・メッセージ……中島生々庵…(27)
生駒から……麻生葭乃…(28)
花彩布哇初春……菊沢小松園…(29)
第23回大萬川柳大会……一三夫・岳人…(46)
明石・浄蓮寺の句碑……大井正夫…(48)
福井多蘭子氏逝く……不二田一三夫…(49)
筆のすさび……八木摩天郎…(47)
75年世相川柳考……本多柳志…(53)
初歩教室……本田恵二朗…(52)
大萬川柳「ムード」……川村好郎選…(54)
柳界展望……(庸佑・整理)…(56)
本社三月句会……(庸佑・整理)…(58)
各地柳壇(佳句地10選)……中筋三幸選…(63)
「新入社」……宮口笛生選…(48)
一路集「スピーチ」……松川杜的選…(48)
「四月バカ」……黒川紫香選…(49)
編集後記……(一三夫・葉子)…(67)

座右の句
雪降る——出雲製織株式会社
(緑之助)
私の句
人間の都合は酒が責めを負い　恒松町紅

室の刊行句会に出席した。
その時にもらった句集が手元にあるが、その自序の中に、両行間を一行あけて、
麻生路郎先生の御高恩に深謝申上げます。
と書いてある。私はこの一行の文章を読んで今又泪を新たにしている次第である。
今この句集から、十数句を抽いて、鮎美さんを偲びたいと思う。

出雲屋で父たり夫たり子たり
追いかけてくる雷雲へ金魚売り
兄の指でつつかれているのど仏
女病みながら桔梗の水を替へ
残骸の工場で鯊がよく釣れる
噴水は月をくだいて暇がなし
べんちやらはやめとけ俺は酒をのむ
公園のトンボ公園とは知らず
一羽二羽三羽四羽五羽春霞
かくれんぼ鬼より怖い犬がゐる
ボーナスで上中下巻揃へたり
父として血の逆流をおぼえる日
若死の白地に椿画きのこし

鮎美さんは椿が大好きであった。
鮎美さんの歿くなられたのを知ったのは、告別式もすんでからでした。それで私は、あわてて或日の夕方阪神電車に乗って、お詣りに行きました。武庫川の堤を、タラタラと下りて右へ廻って右側のお家であった。
鮎美さんの句の
風呂好きの老母に三日月きまの道
を、思い出して、七日過ぎの夕月が出ている堤を鉄橋の方へ歩きました。
因みに、鮎美さんの御逝去の日は、昭和四十二年九月十三日(六十七才)であります。
謹んでご冥福をお祈り申上げます。　合掌

川柳塔

若本多久志選

大阪市　中川滋雀

豚饅の香りが唄になる歩巾
長生きして欲しいにんにく食べさされ
娘夫婦の隙間に入れない早寝
神の摂理　枝は互いに擦れ合わず
和と書けば角がとれてく墨にじむ
おいづるを脱ぐ喜びの日を思い

尼崎市　高津徹也

嘘二つ一つは俺を責めるため
小さきもの針の穴なり老の背
三面鏡がつらい心を見抜くから
うれしさは心の中の鼓笛隊
摑みたい虹があるから恋がある
降る雪の白さと同じ愛の音

鳥取市　河村日満

悼北川春巣博士（一句）
がっくりとさせる訃報も月遅れ
賛成に双手のこころ安楽死
文明に溶けこみ父もガウン着る
神様を出汁に観てきた伊勢高野
柏手を打つ瞬間の信者です
湯豆腐をみつめてこころ踊りだす

神戸市　小浜牧人

反論の言葉を若いなと思う
埋もれ火となる父親で死なんかな
明暗の岐路にダルマが置いてある
焦点を絞ればあばたが見えてきた
丘は春風　二浪トンネル抜けて出る

和歌山市　野村太茂津

真珠湾吟行
真珠湾恩讐越える祈りこめ
呪縛とも水漬く屍に立ち竦み
廃艦を洗う波に言葉のある如く
古痕の疼き真珠湾かきたてる
身を責めて責めて老兵生きつづけ

岡山県　嘉数千代香

姿見を開いていくさはじまりぬ
野仏にまあるい嘘をとがめられ
人間不信のなかで自分を裏切れず
腹のたつ時もえくぼはふたつある
生き甲斐は一番星が語りかけ

倉敷市　水粉千翁

花便り屈かぬ厨刻む音
花の散る実の付くさだめ問うように
風有情さだめゆかしく花を斬る
花浴びてここに極まるのか孤独
花有情風のこころにいさぎよし

大阪市　本多柳志

マンションのピアノにほしい消音器
散り果てて春待つ構え御堂筋
樹氷見に来いと左遷の山便り
アフリカのまぐろで握る浪速寿司
誘致した企業追い出す町議会

青森市　工藤甲吉

天網恢恢疎にして賄賂逃がさざる
この上のなき安らぎは我が枕
愛憎が卍巴に夜がくる
生生流転最後は北のどんづまり
ふぶく日はひねもす呪文聞いて暮れ

八尾市　香川酔々

脛の傷かくす男のふところ手
望郷の心にかける島の橋
人間が同じ人間見る白洲
つくばいに残る流人の水鏡
海鳴りへ少し傾く北の町

泉佐野市　阿萬萬的

枯れたプライドにすがりついてる城下町
何をする車か過疎の山を越え
小京都落葉が走る冬の音
木々裸ながら春待つ芽が赤く
夫唱婦随平々凡々なのが愚痴

西宮市　藤村〆女

小原女の荷物をかつぐ娘がきれい
歓迎のキスもうれしく頬に受け
孫のせて動く木馬も春のうた
老いてもなお女であり血が騒ぐ
独り寝の部屋の広さの夜が憎い

岡山県　浜野奇童

合掌へ笑顔の亡母の健やかさ
教え児の方が禿げている笑い
教え児に次の一手を教えられ
肩書きを捨て毒舌の暖かし
喝采へ主演の瞳少し濡れ

島根県　藤井明朗

人生の坂道に来て運不運
春　ポケツに僕の夢ふくれてる

労賃相反す不況まだ癒えず
久しぶり下駄の感触花だより
新築に座し落ちつかぬ日々

桜井市　岩本雀踊子

僕だけの世界があった夜の音
立つ鳥にごさぬ停年の日の鞄
騙されてみようかおぼろ月夜かな
すて切れぬ故郷に先祖の墓がある
冬眠からさめた蛙で腹がへり

東大阪市　竹中肖二

「かまくら」に童話拡がる灯が揺れる
正確な時計がフット憎くなる
廻り道しても行きつくとこに着き
やり通す意地へ誹謗がつきまとい
自信ない男が寄って誹謗する

大阪市　不二田一三夫

割り箸無惨　左右に引き裂れ
守り合い奪い合いして愛という
男女とは砂にも雄と雌がおり
声きけば負けると電話もう呉れず
酸素吸入そんな家計の煙り立つ

貝塚市　野坂つき子

スキンシップ父と娘で飲み歩く
金もった友の溜息聞かされる
週刊誌追う目少女の貌でない
薄っぺらい絆を神は知ってはる
借り物の愛で両耳痛くなり

島根県　堀江正朗

白杖で春のぬくみを迎えに出
茶で濁す訳ではないがまるくすみ
お帰りと呼べば足音妻でない
味ほめて瞼に皿の美しさ
長生きをしろと胃袋つぶやいた

八尾市　高杉鬼遊

応接間この家の猫に覗かれる
千羽鶴祈り果さぬのも混り
野次馬の石に打たれる悪の華
くちなしの花の白さに訣れたし
下り坂小さな花が眼にとまり

八尾市　高橋夕花

百ヵ日亡母がすこうし遠くなる
細雪あるかなきかの女の炎
堪える日の心の渦をみています
いたわりの一言足りぬまま暮れる
美しい嘘で夫婦を浄化する

松江市　小林孤呂二

人生の哀しいすべてが金に尽き
風雪に耐えて僕にも始発あり
Uターンの娘へ呉服屋の春便り
逆らわず生きて五十という歩み

今日も造る心にもない笑顔

宇部市　平田実男

神主も願をかけてる子の入試
嬉しさに淋しさ子に背丈を越され
白髪抜いてやる時の妻素直なり
野菜高農家の苦労には触れず
総入歯痛んだ頃をなつかしみ

富田林市　和田維久子

寄り添うて春を奏でるペアの旅
椰子の風しわものびます夢の浜
表彰の肩重くなるまるい筒
努むるに達し得ぬ日のうとましく
人生航路籠に乗る日もかつぐ日も

島根県　榊原秀子

ここいらで風邪とさよならしたい立春
平凡すぎて日記の白つづく
手箒も私の癖を知っている
夕烏絣模様の空にする
飲み下す言葉で円く平和な灯

堺市　河内天笑

天国にどうせ行けない花見酒
絵の女　私も笑う目に変わり
天を仰いで無欲をとり戻し
孫の絵にヒントを貰うベレー帽
鯛焼きが天を泳いでいる楽譜

富田林市　板尾岳人

金剛山だから他人の恋許す
寝ころんで山の高さを聞いている
ゆで卵割れずに登りたがるので
蛇の目傘濡れているのにささぬ峰
山の音みどりが濃ゆくなりそうで

大阪市　大坂形水

改築は又々近所に喫茶店
内の者だけなら成り立つ店開く
不覚にも知っていながら罠に落ち
勝っていて総合点で負けになる
堅い男の堅いゴルフに兜ぬぐ

大阪市　吉田圭井堂

不況下の山河空しう人馬やせ
将来に賭ける子の夢親の夢
LLの妻へ夫のやせ細り
善因が善果にならず聞く悲報

大田市　藤田軒太楼

へそ曲りそこを父親かっている
残業の連絡電話に牌の音
PTA用の衣服は地味にする
寒波のいたずら樹氷の美を作る

生駒市　草深酔升

色も香も秘めて尼僧の悟り顔
窓越しにツララ眺めて茶をすすり

不況風よそに春日の鹿肥り
はからずも形見となりし『聴診器』

大阪市　太田良子

好きだから拗ねる工夫も心得る
七曜を気ままに送る余生なり
酔う程に昔々の事にふれ
肩書きが沢山ついて孤独なり

下関市　国弘半休門

ちょぼ打って呉れても電文読みにくい
追越せぬ黄のラインが憎らしい
「有難う」言うたかねとはいい躾
振袖の袖は喜怒を舞いこなす

岡山県　直原七面山

地球自転ストがあろうと無かろうと
訳の分った課長と言われるのにも金
噂の中でやつれ行く美女
口がすべって洩れた本心

大阪市　室谷徹舟

初夢も見ず心臓も良くならず
発作ない日は有難く日記閉ず
盗難に心を一つ開かされ
ウンテンポ遅れているが老母の味

高槻市　若柳潮花

鬢つけの匂い稲穂の揺れる髪
喪に伏す女の指の黒真珠
友禅の牡丹二十歳の裾で燃え
眉を描く女に嘘のない鏡

岡山県　横山一声

振りむいて見ても帰れぬ道であり
斬れば血が出そう能面の舞う
こわれても茶碗土に帰られず
大欠伸して約束をつい忘れ

大阪市　津守柳信

いたわりの言葉に飢えていた弱さ
人様を信じて生きる果報者
思いやり過ぎた裏目に腹を立て
争いは避けて付添い小さく居り

和歌山市　沢山福水

正論を吐けばこの世は住みにくい
燃え尽きてもう目標のない旅路
正月も野良着老母の背が丸い
竜神が秘仏を護る寺の門

倉敷市　能登原白水

はげましの一語一語が温かい
家まろし馬鹿さかげんも母の味
雪溶けが初春の序曲を奏でそめ
難関を越えたら虹が見え始め

橿原市　岩井本蔭棒

帰郷先ず先祖を拝む子らになり
出陣の鎧も斯くや朝の服

戎さんも済んだで春のプラン練る
騒音に悩んでいても耳は掘り

倉敷市　稲田豊作

粉飾の言葉も忘れ宴婦の日々
新バッジつけて企業の走狗となる
首枷をしたままオヤジ酔うている
生者必滅そんな約束つい忘れ

島根県　錦織文子

如才ない姑ともならん春の雪
右派にも左派にもなれず風のまま
二月の山路息吹の芽に出逢う
美辞麗句心素顔になりきれず

松江市　岡崎祥月

退職の祝いほんとにご苦労さん
間貸しでもしようか妻と対話する
臨職も平気山坂越えた俺
我流でも飾れば生きる花の精

高槻市　福田丁路

塵を焼く煙も幽し花の山
畑を打つ土の馨りに春霞む
み仏のいますお山の朧月
み仏の法の厳しさ土下座する

諫早市　原田明春

晩酌を二級に落して飲む値上げ
ひと廻り下の女房にすねて見る
良妻賢母小遣いちびりちびりくれ
逞しい鼾たよりになる男

島根県　西村早苗

ふる里は吹雪電話が凍えそう
丹前に替え未来図を引こう初夜
妻失なうて冬の蝶なり笑わない
残り柿鳥が冬を食べに来た

鳥取県　鈴木村諷子

庭の隅でも鶏広々と産みたかろ
アロエ効くことを医師からきかされる
しっかりとつまんでいたらだまし舟
軍歌集の落丁　女すげてくれ

藤井寺市　児島与呂志

学友と逢える電話のはずむ声
寒雀どこで寝てたか朝告げる
ひっそりと全身哀しい酒の酔い
自己批判表彰状に見下され

尼崎市　黒川紫香

ご対面しわくちゃどうしの顔で泣く
落ちそうな屋根で由緒だけ残り
古寺で冬を堪え抜く虫も居る
遅参した男が一番よくしゃべり

豊中市　戸田古方

眼を閉じているからこんなことも見え
ひとつぐらい心見る眼にしてほしく

満開に咲いた桜は塗り残し
達者やさかい達者のことを考えず　西宮市　島居百酒

日本の庭バスの窓から観るハワイ
沈艦へ向けるカメラに影がさし
広島のドウムと対話す真珠湾
清貧と孤高へ薄い肩をはり　守口市　羽原静歩

コマ無心　無心に回る春の宵
91歳の恩師を囲む（一句）
そのかみの恩師の手を取り足を取り
おぼろ月古城の春の緋毛氈
人は来たり人は去り末法のページくる　出雲市　原独仙

三月へ孫と指切りして期待
複雑で多彩日本語は便利
酒風呂に這入れば満足するだろう
野良猫に油断突かれてからの智恵　東京都　山根白星

老眼に老眼のけをからかわれ
愚痴きいているこの人もこの程度
人見知り生みの親たり撫然たり
手に職を喰うや喰わずに持っている　和泉市　西岡洛酔

小心の人生今日もまわり道
実直の歩幅きっちり霜を踏み
マンションのスピッツ女王の顔で居る
一円玉淋しく歩道に見捨てられ　大阪市　河野君子

胸の火を文箱に入れて今日を閉ず
風邪に臥て花の呼吸をききもらす
記憶の中の亡母の姿よ寒椿
入社の子に貰った老後の予約券　倉敷市　藤井春日

真実一路心の蓮開かれん
多角のスポットへ真実は黙してる
喜んで地獄へ落ちる肚づもり
行きずりの女が夢の中で笑み　島根県　堀江芳子

かたつむり病むなよ殻を負いきれぬ
新聞に老女わたしとおない年
夫婦とゆう不思議さふっと箸止まり
下を見て暮らせば愚痴に遠ざかり　鳥取市　大塚豊生

倖せという盃に過去を秘め
ひと言の詫が言えない孤独感
酒癖に区切りをつけるレントゲン
はつらつと少年すでに大志抱く　守口市　野呂右近

差しのべた手に棘があり握れない
堂々と糸張る蜘蛛に見る勇気

新聞の活字に春が先き走り
公害の海に鯛焼泳ぎ出る

堺市　高橋千万子

人生観友の訃報にゆれはじめ
善悪も涙はみんな真珠色
甘いキス受けて人生狂いだし
合格の肩たたき合う春の街

和歌山市　津田与史

戦争は嫌いとうそぶく勲七等
大寒の胡瓜は明治のものならず
不平など無いらし蟻はよく動き
春宵千金孤独が私を漠にする

大阪市　西出一栄

福詣り採まれてもんで気が和み
大学をおえて羽ばたく空がない
心斎橋土曜の午後の道せまし
柳友の来て老の空白埋めてくれ

大阪市　天正千梢

五十年己を探して求め得ず
結局は無一文だと悟りかけ
襟を正せば因縁見えて来た

ハワイ吟行

真珠湾心眼念仏となえけり

呉市　槇田英詩

夫婦茶碗母当然と小を取り
子の巣立ち妻のんびりと化粧する
関係はないが汚職を拾い読み
禁煙と大書灰皿仕舞われる

竹原市　時広一路

酒の精今日は悪戯したくなり
強壮剤飲むとき男負けている
積み換えの効かぬ積木を積んでゆく
花愛すみんな佳人にされている

西宮市　若林草右

自慢そうにこっちも風邪だと電話口
値上げから満身創痍という手紙
野を渡る子供の声も春のもの
体重計こわごわ乗った雑煮餅

大和郡山市　森田カズエ

色眼鏡かけて見るくせついて老い
接続詞豊富に女よく喋り
犯人の頭脳のよさも云う時効
味噌汁が姑に似て来たカッポウ着

倉敷市　小幡里風

ゲレンデの白さへ自我を捨ててくる
ハンデーを少し貰うて単細胞
和解した二人で仰ぐ昼の月
胸襟を開いて言葉の距離を詰め

島根県　大森孝華

またひとつ課題の消えてふと侘し

日めくりへあらたな日々を引きずられ
病床へかたくなの心侘しすぎ
子の贈るダイヤへ謙虚な指迷う

神戸市　仲　どんたく

身体髪膚毀傷だらけのボクシング
エスカレーター横目に階段行く若さ
ゴーストタウン残して海洋博果てる
やおよろずの神に祈って受験の子

和歌山市　若宮武雄

レイかけてゆめのハワイの夢心地
二枚舌なくてかたわと思う日も
捨て植えの剛く育っている訓え
モナリザの微笑凡夫へ距離がある

倉敷市　野田素身郎

水割りでちいさな不安消して寝る
手話交す小指の霜焼痛痛し
老眼鏡持ってこさせて爪をつみ
元海軍綻びくらいならば縫い

東大阪市　本多清人

それぞれに帰る巣があるターミナル
極楽へ行ける枕は北を向く
川流る流れる果に母在わす
故郷も川を汚して村栄え

和歌山市　内芝としよ

レイかけてハワイは国境のない笑顔
遺影にもハワイの楽しい旅話
乱れる心へ花を買って見る
雑草の執念岩場にしがみつき

松原市　玉置重人

スランプの止まり木スランプ拾うてる
メガホンを持つ父はいつも悲しい
ひとり住む女ひとりの香が哀し
ホノルルの夕陽銀婚へ餞ける

愛媛県　渡辺暁童

反哺の孝も　敗戦が切り
つきぬうらみを　年で忘れる

相つぐ凶報

足元へ満ち来る汐に似た訃報
村長じゃ救いにならぬみかんの値

岡山県　出原敬一

堪えている幼い喪主がいじらしく
孫愛しまろき臀部に蒙古斑
血のたりぬ時計で少し遅れがち
不孝とは亡母の箪笥に紙魚親子

兵庫県　遠山可住

風邪ひかぬ妻と決めこんでいた不覚
タバコ喫う反抗のたかが知れ
土帰月来ええ奥さんになりはった
教養を見せる英語をちょっと入れ

兵庫県　河原みのる

答弁を吐き捨てクルリウシロ向き
スト慣れて豪雪ダイヤおどろかず
百姓も高価いキャベツを買うて喰べ
祈る欲なき神詣で空しくも

松江市　舟木与根一

辰年の国会雲を呼ぶ気配
すき焼きで親子の対話してる箸
藁ぐらいつかませ易者銭をとり
素晴らしい印相で捺す保証人

倉吉市　奥谷弘朗

ふる里の餅で旧正月を祝う幸
ご機嫌の妻は早春賦を唄い
敵に勝つ執念変化球を生み
肩たたき受けて仕事に身が入らず

島根県　小砂白汀

肩書を付けぬ名刺にある余韻
乱暴なことより言えぬ愛もある
泛子ぴくり命がけとはつゆ知らず

ロッキード事件

コソ泥でさえもはじめはシラを切り

美祢市　安平次弘道

タンス満たして妻に鼻唄が出る
鍵を任せて女は罠を確かめる
信じたらあかんと金にささやかれ
パチンコの根気を妻にほめられる

岡山県　竹内翁童

受験シーズン家中鼓動止めている
せめてもの情け左遷を見送らず
ハイミスの職場暗雲はらみそう
大地の鼓動素足に聞いてる日曜日

大阪市　川口弘生

隅っこのがよく稼いでる赤電話
破鍋に綴蓋今日の用が足り
大阪の鬼門に住んで医者で食い
ジャンケンポ鬼は好きな子追いかける

竹原市　山内静水

音たてて背骨がくずれそう辞令
男もう尻にひかれているデイト
ピアノでんとすえてゆがんでる額
静かなる情熱ペンを研き澄ます

枚方市　宮川珠笑

レストランちょっと茶漬けがない不満
利子払う身に一と月が早すぎる
ウイスキーなめて句集をめくる贅
父を焼く点火ボタンを押せという

羽曳野市　塩満敏

オスの本能くすぐる男性化粧品
春が来た女は恋の色を着る
企みをかわして女スプーン置く
ジーパンの娘は恋のギターひく

惜しくない才とも云われ他人の逝く
成人式娘に和服着せたがり
勉強のきつさへ親もねておらず
湖西線琵琶湖の青と雪の白

奈良市　宮口笛生

母さんの男結びで来た包み
ジーパンの娘あぐらが様になり
春を待つ蛙の寝床掘りかえし
吉田山巣立つに自由な空がない

泉大津市　村上春巳

俄雨マキシの裾へ遠慮なく
ロングブーツ抵抗して履いて行き
云い勝って心に滓がうき上り
明日の虹信じて今日の日記置く

大阪市　黒田真砂

切れ凧の自由の夢はあっけなし
魚屋は生きているよとおどらせる
むっつりとして一言あたたかい
飴玉を頬に思い出みな遠し

松山市　谷のぶお

退くことも知って前進考える
かけひきにたけた男でそつがなく
如才ない男もここは読み違い
おみくじの吉を信じて疑わず

大阪市　河井庸佑

君の名はとまではいかない過去愉し
うどん屋でたてるプランのたかが知れ
虚無感の中にほんとの僕がいる
とんど燃ゆその音まさに春のもの

竹原市　森井菁居

不況ですダイヤモンドの大バーゲン
しあわせの物差し黄金色とはかぎらない
うわさ又女の心に火をつける
うたかたのあぶくにも太陽虹見せる

大阪市　藤田頂留子

抵抗の北山杉が賞でられる
百万ドル夜景の一灯僕のもの
仏像を護る仁王は人へむき
自認する意思の弱さに在る胃散

八尾市　内海幸生

人形は笑いつづけて抱かれます
プライドをくずさぬ服がくたびれる
合掌にまぼろしの杖みえてくる
躊躇なく愛受けられて孫キッス

岡山市　川端柳子

常連が揃い女将の饒舌な
良心のかけらを探す慈悲の顔
説得も空し反発のみこだま
見殺もさりとて親のおろかしき

平田市　久家代仕男

和歌山市　吉野冨子

世話好きの因果誤解の渦の中
子を産めず貰わず妻は金を溜め
傷心へ身の置き所無いうつろ
血の通う思いで送る流し雛

和歌山市　垂井千寿子

戦中派生涯爪は染めぬ気で
常識の縄細く細くする
雪降れば老犬らしくとじ籠もる

ハワイ旅行

賞品の句集の亡夫と空を飛ぶ

新宮市　大矢十郎

甘い父が賞められている世の狂い
又人を信じて妻に笑われる
まだ生きていた老人へ気が和む
鏡台へ朝を肘張る共稼ぎ

三重県　川上大輪

母の膝でむかし話が痩せてゆく
崩れ去る石だが一つ一つ積む
大上段に構えて際が多くなり
どの音もみな生きている朝の街

大阪市　柳原静香

伊豆の旅

老いてなお燃えるものあり伊豆椿
民宿の人情温し伊豆みかん

海の蒼　吸殻一つ捨てかねる
星暦信じて夫婦新春の膳

大阪市　宮尾あいき

わかってるのか九官鳥が祖母ちゃん
香水のプレゼント老の血が騒ぐ
冬ごもり女に戻り針仕事
北斗星探す瞳がよごれすぎ

大阪市　金井文秋

無視された美貌が意地になる炎
分を知る事で野心を消して行き
出来ばえのまずさへプロは妥協せず
目醒しに頼らぬ齢になってくる

松江市　柳楽鶴丸

「ありがとう」日本一美しい言葉
反省をしても素直にはなれず
大失言アア日本語はむつかしい
腹のたった日の時計は止ったまま

宝塚市　傍島静馬

かげ口をたたいた口が読む祝辞
友の訃が頁を埋む初日記
心からあふれる涙はとまらない
婦人年すんでも女に気が抜けず

香川県　三井酔夢

傷口が癒えると人を又信じ
粉雪に少し陽気な石地蔵

逆縁の訃に慰めの言葉なし
中年の憂愁メガネ買いかえる

富田林市　岩田美代

鯛やきの悲しい過去に触れさせる
春がそこかたぴら餅のうす赤し
ロマンが欲しい雪の夜の赤電話
ある仕事裏切る事に慣れている

八尾市　宮西弥生

子を産まぬ女で天使追っている
ミンク着て女　他人同士の顔
少年の恋ペンの寒さに死んでいる
宝石の光りに心凍てるもの

島根県　栂みどり

初暦除夜の鐘からめくり出す
春の紅せめて五十路も松の内
巣立つ娘へ生きる試練が色走る
焼きいもを呼ぶ足音へ冷えつのる

松原市　谷垣史好

何かいい匂いも春の夕暮れ
黒猫の目に本心を見すかされ
空瓶のフタのないのは寒そうな
庭の八つ手のアナクロニズム

竹原市　三宅不朽

闘病の静かに眉をはる佳人
石にも花咲く夢自信の朝を起き

会うこともなく向き合うほかにないレール
口下手でよし職人である限り

松江市　恒松町紅

電話口誤解が解けぬままに切れ
値上りへはがきぎっしりつめて書き
悪役にされても嘘がつけぬ僕
言い過ぎた電話へ残る不快感

神戸市　中村ゆきを

早春のニュースクロッカスが咲き
春風に誘われベレーの色を選り
受験の子真夜中に聴く冬の雨
天皇を愛した男の血は濁り

神戸市　佐々木静泉

帰るとこあって吹くのか木枯しよ
ふるさとはわたしが土になるところ
自動ドアさびて夫婦の空転す
食べたいものが食膳にのっている倖

大阪市　江城修史

軽い日も重い日もある義理を下げ
濡れて行く犬は今日を生きる顔
めぐり逢いどん底同志の手の温み
変心の友の別れは瞳で告げる

藤井寺市　西いわを

願結ぶ天神様の梅の木に
恥部かくす無花果の葉となりてより

近付けば冬芽は生命息づかせ
咲く匂い花実忘れた沈丁花

京都市　松川杜的

出勤簿押すよに午後を喫茶店
淀川の鉄橋もう大阪と云うリズム
模様替えが好きなワイフでつつがなし
飛ぶように売れて鯛焼五十円

松江市　中川晃男

踏みしめて退職までの階のぼる
給料袋の重みズッシリと、最後
割り切った若さへバトンタッチする
はみ出しの人生二度目の賽をふる

松江市　吉岡逓児

見せしめの為の鞭でも打ちどころ
内閣総理大臣殿へ一言コップ酒
友の訃を聞く日の雪が動かない
筆墨展判らぬままに見て通り

東広島市　高橋鬼焼

ある祈り二月の父に職がない
ストーブが燃える受験の子の無口
春を待つ鈴が冷たく鳴りつづけ
コップ酒働く詩がつめてある

八尾市　内海幸生

限界に挑む樹氷を人は賞で
そろばんを握って墓地を選っている
ふれぬから帰りたくなる母のふみ
雲水の足どり本物だと思う

八尾市　大路美幸

レイかけて貰う出逢いを大切に
真珠湾の過去を心にとどめおく
ワイキキの青に平和が溶けている
進学に賭ける夫婦の二部合唱

鳥取県　清水一保

一年の計色あせて二月過ぎ
根生も強く芽生える雪の園
白一色雪の世界に過疎眠る
父ちやんの失言大臣でなくて済み

大阪市　山川阿茶

おつとめの叅寿のブーツへみんなの眼
午後晴れる予報へ靴を迷いけり
はねのけにされてかすねてかちぎれ雲

高槻市　山田季賛

一杯のコーヒで妥協の話する
停止線へブレーキ素直に効かせ
ヘルメットかぶれば心引き締り

東大阪市　斎藤三十四

生駒から春の便りが匂って来
身綺麗になって来ます刑務所へ入り
保護室で禁酒誓って帰らされ

京都市　山本祇風

進ませた時計に次の仕事聞く
発信の夫へ憎悪と思慕の日々
八分目にしとけず欠勤届け書く

仙台市　川村映輝

ダムが出来川は自由を奪われる
大穴をねらいつづけて貧に居る
週刊誌信用しないが面白い

氷見市　関美子

ブルースがしみる女の幾山河
死ぬ権利ないから底冷え時代耐え
心の赤旗浮き足立った街で振る

大阪市　神田秀峰

プライバシー黙秘を武器とする粘り
空洞の如き無想の人が増え
気の合った不思議嫌味も聞えない

小松市　馬場魚山

歳末へ新年号が笑ってる
紅白が流れそば屋は火を落し
A型を正月の客持って来る

貝塚市　行天千代

我が人生大きく大きく変えた人
悲しみは夫のお墓へ捨てに行く
牡丹さえ薬しべ脱いで春仕度

東大阪市　落合思月

左遷にもなれて気軽に荷をまとめ
鏡打ち砕いてヒステリックに笑う
再婚をこばんで位牌にぬかずきぬ

八尾市　古川鶴声

浮気する男へ中ピの煎じ薬
山賊の出た跡モーテル建つ峠
三億円霞の向うで分散し

唐津市　新岡回天子

出しぬけにスピーチ上手な子に惚れる
二、三年もう鶯も来ない梅
四月馬鹿本当になりあわててる

米子市　増田竹馬

助手席へ熱い瞳のプロポーズ
髪染めて顔のシワには手を付けず
老夫婦灰まで続く小ぜり合い

鳥取県　林露杖

一ぱいのグラス女の眼がうるむ
不況風わが心にも刺が生え
茜雲あすの期待に染め上げる

鳥取市　両川洋々

妥協して帰る淋しい影を引き
多数決を家族でとって義理を欠き

子を三人産んだマニキュアとは見せず
守口市　村田瓢太

気にいらぬ奴のは咳さえうとましく
理論では勝ったが結局金に負け
可愛がっても結局孫は親のもの
姫路市　梅谿庵不酔

チラホラの拍手に司会多数決
名刺には資本百万とは書かず
妬く方が悪いことしたように泣き
島根県　松本昌

赤旗を読むふところの淋しい日
山鳩が鳴くふるさとは水清し
誤字多い便りに義母の愛受ける
鳥取市　小林由多香

後任へアンテナ残し社宅出る
早春の山脈いまだ雪を抱き
アンテナへ並んだ雀にのぞかれる
堺市　伏見茂美

ハワイ旅行より（一句）
ここはハワイ化粧も派手に紅つけて
ドラマめく一人暮しのもの思い
浮雲の落ち着く先が気にかかり
岸和田市　葛城伊三郎

仏にも如来菩薩の定めあり
賞罰もない停年の平社員
ひそひその話はみんな金の事
笠岡市　松本忠三

講義中雨から雪に変る窓
採点へ主観が少し動きかけ
質問はありませんかと時計見る
大阪市　西川誓二

苺頬張ばれば春が拡がる口の中
み仏が手をひき給う老いの坂
煮えて来ぬ商談料亭で煮えつまり
東大阪市　竹中綾女

腹立てぬ誓い昼にはもう破れ
生き甲斐を孫に求めて嫌われる
チグハグにボタンを掛ける火事騒ぎ
米子市　林瑞枝

転んではお銭は無欲な人へ向き
朝に夕に神を拝んであてにせず
人褒める癖を好かれて永く生き
岸和田市　福浦勝晴

不如帰川の向こうに過疎の村
宴席を抜けた浜辺に藻の匂い
コップ酒明日の足場を組む屋台

今治市　越智一水

春斗をまたず胎の児動きだし
貧しさの中でいのちを大事がり
春そこに来たなと寝ていて思う雨

竹原市　小島蘭幸

日曜は髭を削らずに昼になり
負け犬よもっと怒りを持ち給え
若さよしキラキラ光るものを持つ

名古屋市　吉田水車

悼春巣先生

聴診器栞紐さえあたたかし
凡人を救うお経のむつかしき
新幹線蒲柳のたちと申そうか

今治市　原田一風

対岸の灯にしんしんと雪積る
アスファルト焚火を囲む朝が無い
酢の効いたチリでおいしい汗をかき

鳥取県　森田布堂

明日知れぬ命尊く今を生き
前向きの姿勢多難な坂が待ち
肩書が出来愛称が遠慮され

京都市　都倉求芽

爪染めて良妻でないと証明す
エリートの坂はケーブルが待っている
我が道の連れは影法師だけでよし

滋賀県　溝口はやを

婦警さんはっしと止める十二トン
老兵に生くる戦さのまだつづく
道祖神より添うている雪の中

大阪市　神夏磯道子

留守をした植木は素直に水を吸い
騙されているから幸せかも知れず
沈丁花匂うて春はもう間近

菊沢小松園

ハワイ雑詠

帰化しても一世日本人として語り
一世二世三世は言葉も通じない
ダイヤモンドヘッドを照らす月となり
ホノルルの夜景眠るのが惜しい
真珠湾日本人の眼で眺め

若本多久志

松籟の和語ふるさとはそのまんま
耐え抜いて得たものはただ無常感
悟れないとこに仏の救い知る
長老にされ乾盃の音頭とる
何もかも腹立たしい世の十七字

宮仕え終った日から風邪
環境の変化要注意とおどかされ
これからのねがいはやむを得ぬ速度

尼　緑之助

妻病む

雨から霙　更けていく看病
予定にはなかった看病の役廻り

浜田久米雄

いざという時には話す種を持ち
不可思議なものに寿命も教えられ
信じ切る煎じぐすりの湯気が立ち
いつまでも生きてとみなが言うてくれ

友人古稀

妻と子と孫に囲まれ古稀の春

本田恵二朗

花開く下積時代の血の彩で
愛憎へ血管膨れたり縮んだり
一本の矢で戦おうとするのも若さ
雪知らぬ児らへ雪姫舞うて見せ
子や孫に残す歴史を汗で書く
一直線に落書をして飛行雲
古きよき打水の石踏んでゆく

正本水客

寄付帳へためらいもなく夫の名
大根をトントン切ってまだ嫁かず
怒ってやはるやろと電話をかけてくる

橘高薫風

偽証する伊藤大久保維新の名
児玉誉士夫の笑い袋や金袋
小佐野児玉の暗い寒山拾得図
田中角栄の潔白を又も信じましょう
勲一等黒き旭日大綬章

川村好郎

道遙か耐えねばならぬ時は耐え
倒産のニュース爪切りながら読む
紹介の手前いと叮重に追い返し
雛の夜も知らずに通う塾の子ら

大萬川柳大会

なお残る寂しさに耐え墓洗う
屋根に落ち屋根より落ちし猫の恋
寝言　鼾　中に歯ぎしり旅楽し
病人の夕刊催促する程癒り
執念の人ときいたが肥えている
雛の絵の葉書で雛に招かれる

西尾栞

▼前号訂正・P924行目―綻びへ飾りボタンが引っかかり

西原　亮

誹風柳多留廿五篇研究

—（十丁）—

八木敬一・西原　亮・入江　勇
紀内恒久・鈴木　黄・清　博美
青木迷朗・室山三柳・岡田　甫

168　**茶をきっし尻をつねる代百銅**

八木—二十軒茶屋の句であろう。浅草・雷門を入って右側にあった。この水茶屋には看板娘がおり、それ目当ての客も多かった。

ちっともほれす茶を二はい銭五文　　拾二・33

茶を五六はいのんで手をにぎり　拾二・29

茶代か六文ほれ代九十文　　天元鶴2

紀内—賛。句の言いまわしから、客は浅黄裏と考えられる。

室山—同。「茶をきっし」と漢語詞で切り出し、「尻をつねる」とくだけて、「代百銅」と結んだのがミソ。

入江—水茶屋でも二十軒茶屋でも可。

岡田—入江氏のいうように、二十軒茶屋とは治定出来ないが、美女が多かった二十軒茶屋あたりか。茶代は決まっていないが、普通は五文。何杯か飲むと十文ぐらいおく。百文おくヤツは女に気のある連中に決まっている。

169　**親椀をたがゑす様に信濃くひ**

八木—「親椀」は、大きな椀。飯椀のこと。「たがゑす」は耕す。田を返す、の意。「信濃」は信州から働きに来ている下男等で、川柳では、大食という約束がある。

信濃者の大食のさまを、大きな飯椀をまるで田畑を掘り返えすように、えらい勢だと詠んだ句である。

どれ程喰ッたかしなの腹がくっちい　　二三・34

たべる外しなのわる気の無イ男　　二〇・21

青木—賛。大きな飯椀にてんこ盛りによそった飯の山が見る間に減ってゆく様を耕やすと面白く表現した句。「たがゑす」は信濃地方の方言か。

ふるさと寒く大飯を喰に出る　　傍五・24

室山—同。「たがへ（耕）す」は、別に方言ではなく、礎解にある如く、「田返す」の意から来た語である。「この頃の賤がたがへす物干のうしと思ふも力なの世や」（『夫木抄』）。

入江—同。

めしばちをくりぬくやうにしなのくひ　　天六・仁2

岡田—同。室山氏の引用語によって「耕へす」がハッキリした。謝。

170 **なぜあつき飯たと兄ハ聞たがり**

八木—初潮の際、家庭では小豆飯を炊いて祝った。現在でもこの風習は一部に残っている。兄といっても、まだ子供の兄にはその理由が分らない。

兄ハわけ知らずに祝ふあづき飯　二・6
なく事ハ無いと俄にあつきめし　拾一・38

入江—贄。これを「初花祝い」という。

娘の御客御馳走に赤の飯　一〇一・37

岡田—同。

171 **珍客に女房御用の耳に口**

八木—「御用」といえば、川柳ではおよそ酒屋の小僧、樽拾いと同様に考えてよい。『川柳風俗志』に、主題句が収められており、「御酒のついでに、ちょっと横丁へ廻って、料理の注文」と頭註がある。

ええ子だと御用八百やへ頼まれる　六・7

青木—贄。『川柳風俗志』頭註の「横丁へ廻って、料理の注文」とあるのは、現代的感覚のように思われる。当時のことであるから、御用に頼んだのは、魚屋、八百屋、豆腐屋、乾物屋等ではなかろうか。

西原—贄。要するに頼んだのである。

入江—同。

客を得て女房御用のみみに口　明五・松4

岡田—同。青木氏のいうように、当時は料理屋などはほとんど無かった。あっても、せいぜいソバ屋ぐらい。特殊なところにウナギの蒲焼屋。それらは極めて少なく、どこにもあったわけではない。

172 **ころんた子泣出すで猶はやる也**

八木—おどり子であろう。おどり子が転ぶだけでなく、あの時に泣き出すので、なおはやるのである。

ころんでの音〆がいいではやる也　安二・信2

紀内—贄。

金ニつまついて踊子ころふ也　二八・32
ころぶハ上手おどるハお下手　一二・10

入江—同。ころべば二分とる。

岡田—同。

173 **是ハ大へんと素壱分雪へたれ**

八木—たった一分、後生大事に持っている素一分の客。雪が降って来た。さあ大変、雪が積って帰れなくなり、居続けにでもなれば金が足りない。かといって、今夜遅く帰るのでは歩くは苦労、かご賃はなし、どうしよう。と考えながら雪に小便をする。

紀内—「でえぶ降すと素一分がこまって居」と翌朝の図であろう。目がさめたら雪、一分では居続けはできず、「アアこの雪の中を帰るのか」と考えながらの朝の小便であろう。「素一分」は「素見」と違って、一分しかもっていないのに、堂々と（?）登楼するところに、素一分の素一分たるユエンがある。

西原—贄。翌朝。

清—小生は翌朝ではなく、遊んでいる最中と思う。帰える予定だったのが雪になり、「是は大へん」であろう。

岡田—やはり朝　夜中降りそうなら、素一分が一分の女郎を買わず二朱の安女郎ですますだろう。

黄銅六角ボールトナット
及び特殊換物全般
合資会社 西出螺子製作所
大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL (761) 三四五二～四
夜間 (762) 四四〇八

麻生路郎物語（16）

―路郎〝妻〟を語る―

東野大八

珍らしい路郎・葭乃先生の相合傘。（昭和三十一年四月八日、川雑婦人友の会と篠山支部合同雨の観桜句会）

この辺で路郎は妻の葭乃をどのような眼で眺めていたのであろうか。その恰好の資料が「川柳雑誌」（S39・5・6・7に連載）の〝妻を語る〟である。葭乃書簡に少々おんぶしすぎた不公平さをここで均等化する意味で、その愛妻記のダイジェストで今回は文字通り埋め合せをしておこう。以下は全文、路郎が書いた。

葭乃と私が大正三年四月九日に結婚してからこの四月九日（S39）で丁度五十年になる。五十年といえば半世紀だ。しかも激げしく移り変った世代であった。いくら恋愛結婚にしてもよくも今日まで続いたものだと自分でも呆れている。しかし振り返ってみると、続いた理由がないこともない。その当時の私は肺尖を患らっていたので、妻を娶るなら第一は健康であること、第二に嫉妬心のないこと、第三は愛嬌のあることという三条件を目標にしていた。

自分が病人でありながら妻の健康を第一条件にしたことは、今にして考えると随分自分勝手な条件であるが、それには大きい理由があった。私の母が肺結核で私が生れて一年三ヵ月の時、郷里尾道で亡くなった。それから私はかなり厳格なおばあちゃん育ちで、母の愛情というものを知らず、学友の母から可愛がって貰ったが、母の無い淋しさは身をもって体験したので、妻を持ったら私の生きる限り妻の命を護ってやろうと考えたのであった。

葭乃の母も、葭乃が六才の頃、肺結核で亡くなりおばあちゃん育ちで、おばあさんがまもなく亡くなってからは父と親一人子一人で育ったのである。

私が蘆村（葭乃の父）にはじめてあったのは、西田当百の二階で句会の晩だった。大正二年の頃である。若い女学生と並んで座っていたので、妹を連れて来たのだとばかり思っていたが、それが彼の娘だった。それほど彼は若く見えた。この娘が後に私の妻となろうとは夢にも思わなかった。

私は大正二年に、海外へ流出の許可願のため、東京から帰阪、姉の病気を看護しながら川柳を創っていたので、葭乃の父との交際がはじまり、私が指導的立場でロシヤ文学の英訳本を一緒に研究したりした。葭乃は学校で英語の古典ばかりやっていたので、アップツーデートの英語や思想的な文学は私に教わる立場にいた。こうした交際からいつか葭乃は私に魅力をもつようになり、私は葭乃を愛するようになったのである。彼の女は伝道の生涯に生きようとする意志を飜えして私との結婚を受け入れることになった。

そこで私は葭乃の父に、妻にいただきたいという手紙を出した。その返事は「さしあげないことはないが、条件があるので一度お越し願いたい」ということであった。どんな条件があるのか勇敢に出かけていった。父蘆村の注文というのは次の通りだった。

「私は長い間、この娘一人を力に生きて来た。が、娘さえ承知であれば差し上げてよろしい。しかし一人娘をあなたに差し上げると私の家は絶家になる。それも差支えはないがあなたの方に籍を入れることができますか。それからもう一つ条件がある。私は今も言ったようにこの娘一人を力に生きて来たので、今更女中をおいて暮らす淋しさには堪えられない。二人が結婚しても一緒に住ませてもらいたい。私は現在教職にあるので、経済の方は心配かけないが、働けなくなったら面倒を見て欲しい。私の言いたいのはこれだけだ」

と言うことであった。そこで私は

「籍の問題は私がすぐに解決します。あなたと同居も結構です。若い二人より少しでも早く世渡りに経験を持たれるあなたと一緒に暮らせることはいいことだと思います」

「それでは仲人をどうしますか」

「それはあなたもご存じだし、私も親しい西田当百に頼んで来ます」

ということで、この縁談はトントン拍子に運んだのであった。二人が既に愛し合っていることは打ちあけなかったが、蘆村はそれと気づいているようであった。二人に顔を赤らめさすようなことは言われなかった。当百は

「ホンマかいな、損ぐのとちがうか」

とはじめは信じなかったが

「よし承知した。しか　、うちの家内はそんな席へ出るのイヤだというがどうする？」

「じゃ仲人は君一人でいい、野合だと言われては困るから君をたのむんだから、結婚当夜の謡だけは君の名調子でやってもらえばよろしい。万一の場合は私の責任だ。君とこへ尻は持って来ない」

と言うことで芽出度し芽出度しと簡単な結婚式を挙げたが、籍を入れる難問題も一ト月のうちに解決、すべて約束通り履行して、翌年には一人の姫を儲け、次々と四男五女の親となり四人の孫が出来て今日に及んでいるのだ。そして葭乃は九人のこどもを生んだ顔もしないで、年よりは若く見えますと言われている。

葭乃は無口で、必要以上のことは言わなかった。声を出して笑うようなことはしなかった。喜怒哀楽色にあらわさず式のお嬢さんだったのである。私の結婚条件の三番目には愛嬌あることとなっているが、この条件だけは外ずして結婚したのであった。

私は私の娘等によく言った。結婚の相手は大学出であること、スマートであること、家は相当の資産があることなどといろいろ条件を持ち出すのもいいが、先方が同じように数多くの条件を持ち出してきたら、お前の方がパスしないことは明明白白だろう。結婚条件は必ず割引することだ。でなければいつまで待っても結婚なんか出来るもんではないと、それで私自身も第三の条件は外ずして結婚したのであった。新婚当時

―**夕食が済むと川柳三句出来**

という楽屋落ちの句で、ぞめかれたものだった。この句はだれが作ったか知らないが、多分楽屋落ちの句の巧い五葉の作ではないかと思う。かくして幸福な日日が過ぎて行き新婚のよろこびを満喫していたことは世の常の新婚夫婦と同じだったといえよう。その頃の葭乃の句に

―**繋ぐ手の羞しいほど月が冴え**

と言うのがあるが、おそらく実感を詠んだのであろう。押売りに凄まれて変な売薬を高価に売りつけられたのも、夫の健康を祈る純情のあらわれだと思えば、バカだなあと一喝するわけにもいかなかった。

葭乃は主婦の座にあっても、世間的な奥様ぶりは発揮しないで、いつまでも女学生型で来訪者があってもただお辞儀するだけである絶えずやって来た柳友の川上日車にもアタマを下げるだけなので、私が

「何んとか言ったらどうだい」

というと「言ってます」と言うが、声は少しも口から外へ出ない。それほど無口だった。

しかし、葭乃の無口は私にとって困る場合もあるが、ムシロ有難い場合の方が多い。私が何をしていようが一切干渉しないのである。徹夜で原稿と取っ組んでいる時に、あなたお茶よ、とか近所のニュースをきかされたり、もう遅いからお寝みなさいとか何んとか言われたのでは気分が殺れて、折角の原稿も滅茶

苦茶にされてしまうが、その段、飯の時間が来ても、飯を運ばないので私の創作的な仕事には世にもありがたい良妻なのである。

そんなときには彼の女は、ハワイの柳友が送って呉れたアメリカの雑誌を読んだり、ドラマの脚本を耽読して、私の筆のおくのを待っているか、机にもたれて眠っているかである。何ん時でも眠れるし、何んどきでも眼を覚ます芸当を持っているので、夜更しもやるし、早起きもする。疲れたら三日でも四日でも眠る。それが彼の女の健康法でもあるという。まるで猫のような生活を平気でやってのける手際は一寸マネができない。この習性は九人の子どもたちを育てて来た彼の女の特技であろう。

葭乃は無口のせいもあるが、若い奥さんがよくやるように他人に宿六ののろけを言ったりしなかった。私が「商業之大日本」主幹をしていたころに、葭乃は次の歌を詠んだ。

ヘルメット冠れる君の年少し
老けて見ゆるも頼もしきかな

それが彼の女の紙の上でののろけだと言ってもいいだろう。クリスチャンの彼の女は啼かぬ蟬のような存在だった。

よその奥さんたちは、宿六のポケットを探って女性の名刺があったり広告マッチがあるとすぐに根掘り葉掘り訊問されるそうだが、葭乃は幾ら名刺が入っていようが、あっちこっちのマッチでポケットをふくらませていようが、そんなものは眼もくれない。キモが太いというのか、その方面の神経が少し足りないのか、彼の女のいうしようがない哲学没法子の実現に徹しているのであろうか。では嫉妬心のカケラも持ち合わさないのかと思うと

—お帰りにならず刺身も色変わる

という句を創っている。この句には妻の折角の心づくしも、夫の帰宅が遅いので変色して「もったいないわ」という経済観念から詠んでいるのではサラサラないし、料理の変色をなげいて報告しているのではない。句意は嫉妬の炎を婉曲に燃やしたものと解すべきである。若いサラリーマンを夫に持つ時代の妻が夫の帰宅が一刻も早くありたいという共通の悩みは、この句に巧みに表現されているとみていい。しかし句の底に潜んでいる嫉妬心を見逃してはこの句の価値は半減してしまう。

ある夏の朝だった。出勤前の食膳に、かき氷を載せただけで何一つ運んでこないので

「飯は？」と言ったら

「これで」と氷を指さしたから

「オレは出勤するんだぜ、朝っぱらから氷を食べて働けるか」

「暑いやろ思うて」とさしうつむいた。

「オレは今後、よそで飯を食うことにする」と宣言した時、葭乃のアタマに閃めくものがあった。それは私が給仕なしには食事をしないし、お酌なしには盃を手にしないことを知っていたからである。

そして彼の女の膝にパラリと冷たいものの落ちたのをみて、私もそれ以上言わずあわてて出勤してしまった。今でも暑がり屋で有名で、首のあたり一面にアセモを出し、家ではほとんど裸に等しい薄着をしているし、ルームクーラーをしてやる資格のない夫は、彼の女が毎日のように昼日中をデパートに避難して、日舞を鑑賞し午後五時ごろ御帰館遊ばすのを寛容するより手がないのである。若妻の頃すでにその暑がり屋であったらしい。自分が暑いので夫も暑いだろうと食事の代りに氷を食べさせようとして、一もんちゃく起きたのであった。今でもそれを延長したような自分本位の親切さは持ち合わせている。

葭乃は金銭に執着を持たない。浪費癖と言うのではないが、どっちかと言えばあり使いの方である。なければないで平気だ。

その昔、電車に乗ったが財布に金がなかったので、四ツ橋で市電から降ろされ、車掌の集会所へ連れて行かれた。幸い車掌の中に川柳家が居て証明してくれたので、キップを借りて帰ったことがあった。市場へ出かけてもエェ海老があったと予算外の買いものをすることがあるが、しゃれの方へはカネを捨てない。

—スフにしてあとは梯子で消える金

という句がそれを証明している。

芝居へ行っても帰りに料理屋へ寄らぬと、行った気がしないというのである。それも小さいこどもを荷物のように横抱きにしてのれんをくぐったものだ。これも見ようによっては、私に打ってつけのベターハーフだったのである。

この写真、厳寒一月下旬のものである。このサマースタイルは？。背景にヤシの樹が見え、ハワイ吟行の方々。右から伏見茂美、高橋千万子、和田維久子、柴田惠美子の皆さん

日米親善川柳大会

メッセージ

川柳塔社主幹
中島生々庵

このたびご当地ウィロー川柳社の方々と私ども川柳塔社と合同で、日米親善川柳大会が催されました事につき、一言ご挨拶を申しあげます。

顧みますと麻生路郎先生の川柳雑誌時代から現在の川柳塔に到るまで、川柳によって結ばれた長い長い歴史の中には、年によっては多少の起伏があったと致しましても、連綿として数十年、異国の地にあって川柳のともしびを護り続けられた皆様のご努力、ご精進、これは全く皆様が母国の言葉に対する強い思慕と、なみなみならぬ、川柳に対する愛情とではぐくみ育てられたもので、今日このような隆盛を見、且つ実を結んだものと考えます時、まことに感銘深いものがあり、心からお歓びを申しあげる次第でございます。

さらに又、この栄光のかげには、陰に陽にご当地邦字新聞二社がバックボーンとしての絶大なご支援、ご鞭撻があった事も忘れてはならぬ有難い事であります。

三年前、私共夫妻がご当地に立ち寄り、お世話になりました際も、限りないご温情に接しました事、昨日のようにはっきりと記憶に残って居ります。「みやこ」での句会の後、林明春氏のご司会で大変ご馳走にもなり築山快夢起氏の乾盃のお姿、最年長の三輪吾一氏の力強いご挨拶の声、ハワイタイムス社の津田十吾氏の懇切なご挨拶、ハワイ報知社の鶴田初子女史の床しいお姿の印象、ウィロー社の加川カロ女さんのご親切等々、走馬灯のように瞼に浮びあがります。それにも増して前山北海氏が旅馴れぬ私達に、終日つききりでのお世話を下さった事も生涯忘れられない私の思い出でございます。

帰国致しましてから、こうして親しく皆様から賜わりましたご厚情を肌に感じましたままを川柳塔の一同にも伝えて喜びを分けあったことであります。

たまたま先年、副主幹西尾栞君がご当地を訪れまし時、旧知の柳友との間で合同句会のお話があり、昨年は副理事長若本多久志君が具体的な打合せに渡布致しまして、この度の親善合同句会誕生となったものと思いますが前にも申し述べました通りご当地の皆様とは麻生路郎先生からの長い歴史もあり、川柳塔ご愛読の同人、誌友の方々数十人も心からご賛同、ご支援を賜わり本大会を盛りあげて頂きましたことはまことにご同慶の至りと存じます。

川柳塔社からは四十名が大挙して参加させて頂きましたが、さぞかしいろいろご厄介になる事と存じますが、どうぞ日頃のご親情によって暖かくご抱擁下さいますようお願い申しあげます。ただ私自身が身辺の事情で同行致し兼ね、三年前のお礼も親しく申し上げ得

ない事を誠に残念に存じますと共に深くお詫び申しあげる次第でございます。

そして願わくばこれからも第二回第三回と定期的に御地と大阪と交互にでも年次大会を持ちたいものと、この機会に提言致したいと存じます。

最後に、皆様ますますのご健康とご多幸を祈り乍ら遥かにご挨拶申し上げます。

一九七六年一月二十日

（代読・橘高薫風）

生駒から

―ハワイの川柳家

麻生葭乃

―西尾　栞宛

ウィロー社との川柳合同大会はまことによい御計画でございます。又私をお誘い下さいましてありがとうは存じますが、近頃の私しは段々からだの動きがたよりなくなり、先日も路郎の祥月命日の法要を万代の家でいとなむに就きまして、一歩（註―令息）が私を送り迎えいたしました。大阪市内は車も使いましたけれど決して楽ではありませんでした。もっともハワイ行きのジャンボ機は内地のちっぽけなのとは違ってゆったりしている事はアート（註―令息）の家内の姪のはなしでも聞いていますが、六時間も乗っている自信はございません。

今私はハワイのことを思い出しています。ハワイの高沢一浪さんは「川柳雑誌」の投句家でありました。毎月一二句の入選の頃から私は目星をつけていました。私は一浪さんに手紙を出し初めました。だから一浪さんはハワイでの私の最初のペンハルでありました。其頃、古川魔花麗さんとその御兄さまに古川風竹さんと云うお方がありました。このお二人は一浪さんのよい飲み友達でありました。それから北海さん、快夢起さん、と次々に一世の方々を知るようになったのです。毎月私から五通の便りは七千キロの海を渡ってホノルル市へ運ばれていたのでございます。そのうちにホノルル市の埠頭キング街を知り、大通りのヌーアヌ街を知り、ワイキキのガラス底の船のことも知り、桜のある噴火山も知り風光明媚のきこえあるカワイ島、モロカイ島も知り、はては野菜、魚、果実の日常の食品の価格も詳しく知るようになってから、ハワイは私には第二のふるさととさえ思えるようになって来たのです。

戦端が開かれる前、これが日本との最後の通信と云うのが取り交わされたことがありました。同胞を偲ぶも今は地図の上（葭乃）とあきらめねばならなかったのでした。ハワイ在住の柳友は帰化されたとは云うものの

帰化しても唄は二上り三下り（草一郎）

で、私どもとの心のつながりは何の変りもございません。こちらはこちらなりに色々と柳友の安否をきづかいました。戦後魔花麗さんと北海さんは軍属として日本の新聞雑誌の検閲官として来阪なさいました。路郎も私もこの時初めてお二人に逢ったのです。一浪さんはたしか戦争以前にハワイを引あげて帰国され一度万代の家を訪ねて下さいましたが、其後故郷で亡くなられました。路郎は早くから万代の家へ戻り雑誌も再発行していましたけれど、私は疎開地へ運んだ荷物の関係もあって第四の疎開地奈良県宇陀川のほとりのお寺に残っていました。私はこの頓光寺と云うお寺で、風竹さんの訃報を手にしたのでありました。内藤草一郎さんは自動車事故で亡くなられたのでこのお二人はお目にかかれずに永遠のお別れとなったのでございます。快夢起さん御夫妻はちょいちょい日本訪問をなさるたびにお逢いしていますのでお目にもかかりお手紙のとりやりもしています。魔花麗さんには路郎も一歩も私も毎月豪華な外国雑誌を沢山送って下さったりして随分お世話になっていましたが、とうとう何の御返礼も出来ず

世話のなりっぱなしでございました。私たちがウイロー社の方々とお近づきになっていた頃はあき坊さんはウイロー社にはいらっしゃらなかったように思います。魔花麗さんは只今商社におつとめのように思いますが選はなかなかしっかりしていられるので好評、新聞へ掲載されていられるとか、私は「あこがれのハワイ航路」が好きで音痴のくせに今でも時々くちずさんでは思い出の数々が胸に迫って来るのを楽しみにしています。もう一度皆様にお目にかかりたいとは思いますが、それは未練と申すもの何事も、始めあれば終りありでございます。ハワイは遠くなりにけりと思いたいのでございます。これは私の心境をあなたにお伝えしたまでのこと皆様にお逢いなされたらくれぐれもよろしくとだけお伝え下さい。当日の御盛会と御健吟をお祈りいたします。

花彩布哇（ハル）初春

菊沢小松園

かつて唄われていた憧れのハワイ航路の頃から一度は是非行って見たいと思いながら、なかなか行かれなかった布哇、やがて航路が空路になって何かと早く便利になって観光も楽になって我々にも機会が廻って来て待てば海路の日よりと言う次第だ。時はよし連れはよし、然も日米交歓川柳という大きな使命を帯びた川柳使としての一行四十名、名月の明るさは伊丹空港でもう外遊気分で賑やかなこと、羽田でジャンボ機に乗り換えて一路ホノルルまで、六時間余追風に恵まれて、往路は二時間もはやい、高度一八〇〇〇M、雲を遙かに下に見て畳の上を辷るよう坦々、実にあっ気ない眠りのうち夜間飛行だ、暁天のホノルル空港太平洋を離れる太陽の美しさは実に息を飲むばかり、さすがの饒舌家たちも感嘆大自然の美しさに魅せられた。空も水も緑も本来こうして、こうも美しいものであったのかと初めてと思うほどの布哇の自然は素晴らしい。忙しく観光の遽しい旅で覗き見する処ではなく、ゆっくり時間を掛けて半月、一ト月の余暇を当てたいと泌みじみ想うほど布哇の春は美しい土地の柳友の知人の出迎えを受けてはやくもホノルル空港に川柳の花が開く土地柄さすがにゆったり構えて大陸のおおらかさの奥の深さを感じた。ホノルル市内観光巡遊、真珠湾戦跡廻り、第二日川柳大会、超一流の名士、日本領事初め商工会頭日系人会代表、日系新聞放送局各界代表者出席という豪華版だった。我々川柳塔の永く印象に残る句会風景だった。ショッピングに国際市場見学、ワイキキの浜のそぞろ歩き、命と機会に恵まれればもう一度ゆっくり尋ねて見たい、そして本当の布哇に触れて見たいと心から思った。夢の島ハワイ、世界の公園ハワイは嘘でないと思った。

生きている倖せおもうハワイ行き　小松園

川柳塔社常任理事会（3月4日）

3月8日の「生々楽天」刊行記念句会や、4月11日の刊行記念パーティ。そこへ2月末日で一応締切った「川柳塔の歌」の審査もあり、議題がギッシリつまっている。

出席諸氏に議題にはいる前、まず応募歌に目を通していただいた。七十篇ほど集ったが一回や二回で決まるものではなし、これには選考委員をきめ、後日慎重に審査することになった。

句画集「生々楽天」は表紙の色から、主幹ご夫妻の絵が美しく、さすがにカラーページだけに、このような句集は最初のものであろう。

330ページを越す重量感にあふれ、主幹ご夫妻の玉句がさらに重みを加えての大句集である。

見返しの表は生々庵主幹の富士を背景に飛ぶ鶴が二羽。同裏は小石女史の二見が浦で、共に心あたたまる絵である。

多久志氏がその間をぬって会計報告をされた。徐々にではあるが読者もふえ、より一層の協力を誓い合った。

出席者は—中島生々庵・若本多久志・橘高薫風・正本水客・傍島静馬・西いわを・島居百酒・小浜牧人・大坂形水・菊沢小松園・川村好郎・不二田一三夫（敬称略）

この日たまたま山本素郎・薫風・一三夫—敬称略—が集ったので小編集会議を開いた。

—同人吟—

秀句鑑賞

——前月号から——

尼　緑之助

完璧の駒組み自ら動けない　谷垣　史好

一歩踏み込めば背後に一瞬空きが生ずる。それがまた気がかり。駒を進めようとすれば取り巻きがうるさい。完璧の陣必ずしも満足と安心に結びつかない。

正直に生きゆく顔は一つしか持たず　小浜　牧人

ロッキード問題は生きかたの諸相を嫌やというほど見せつけた。さて自分はどうだと思ってみても、あんな、たいそれたことは何百分の一にしてもやれない。必竟顔の使いわけなど出来るわけがない。持って生まれた顔は一つしか持っていないことを痛感するのみ。

例えばの話を妻が許さない　白岩　文衛

何気なく言った言葉だが妻の逆鱗にふれた例えばの話だと繰り返しても、火の手は上がるばかり、世の男性はただへキエキの他なし

マニキュアの指でみかん撰って買い　小林由多香

わかり切った品物でも、手に取ってひっくり返してみなければ気がすまないのがご婦人の性（さが）のようである。濃いマニキュアから浮かんで来る女性像、ありふれたみかんを、あれでもないこれでもないと選んでいる人と物との対象が句をたかめている。

夫婦して積木のゆれをかばい合う　岩本雀踊子

夫婦の愛情とはいつ頃から密着するものだろう。別に申し合せをするわけでもないが、中年を過ぎてから濃度を高めていくようである。平凡と言えばそれまでだが、中七が句をひきしめている。

不況への面当て厚いテキを食う　出原　敬一

毎日あくせく働いているが、一向おもしろくない。飛び込んだ食堂で厚いテキに挑んで、いささか留飲を下げたつもり。比較的広汎な内容を小気味よくまとめ、時事吟として佳吟。

昂ぶりを消す洗濯を白く干す　嘉数千代香

洗濯をはげしく、そして入念に、干した物は純白。やれやれと胸をなでおろす。沈静へのたたかいを下五でキリリと結んだところ非凡である。

改らたまる新春へ妻のピンカール　山内　静水

一応越年のけじめをつけて待つ除夜の鐘、妻のピンカールにも迎春の気が動き始める。

続々と達者を選ぶ年賀状　吉田　水車

賀状の感懐を詠ったものは毎年数多く目にするところ、しかも焦点に限りがあって類句が多く、佳句に接しがたい。この句も格別推賞するほどのこともないが、中七に賀状のうれしさを感じた。

空を行く農協さんの初詣　福田　丁路

農村は今後はいろいろ取り沙汰されているが、農協主催の団体旅行は相変らず盛んである。初詣に飛行機を配したあたり、農村の底力が伺われ、ほほえましい。

晴着の娘腹を空かせて帰って来　野田素身郎

折角作った晴着、まず初詣に出かける。快晴に恵まれ、あちこちお嬢さん姿のおひろめに相当歩き疲れた。食堂でラーメンともいかず、「ウワーッ、和服はこりごり」とばかり脱ぎ捨てる。現代ッ娘を活写している。

気にくわぬ客もあろうに自動ドア　塩満　敏

人間なら感情が動くが、自動ドアの働きに人間は考えさせられた。

猫抱く女の乱れ髪　直原七面山

三句共一応出来ているが、何かもの足りなさを感じる。十四字詩のむずかしさである。

—水煙抄—

秀句鑑賞

——前月号から——

高杉鬼遊

人づまとなにを掟にして逢おう　定金　冬二

人づまに逢ううしろめたさ、そのために男は掟を用意する。自分に科せる掟ではない。第三者の眼に是非必要な免罪符なのだ。この人は善人だと思うが、世俗は悪人と呼ぶかも知れない。こころ優しき男の心情が吐露されて、この作者ならではの表現力に敬服する。

新しい値をもう覚えたか販売機　高野　不二

めじろ押しにこう度々値上げされては、怒りを超えて阿呆らしくもなる。自動販売機の句は多く発表されているが、機械化に対する風刺だけではない。作者の鋭い眼を高く評価したい。

微笑めば霊長になるふしあわせ　高橋　古啓

何ものをも許す寛大さは、時に自己との闘いを強いられる。己を苦しめ他を救う所業は仏の微笑みに通じる愉悦に浸ることもあるが限界を超えると所詮人間である。時には自己の存在を示したくもなるものだ。

朝のバスやる気感じぬ顔ばかり　西山　幸宮

仕えの哀しさ、一個の歯車には一分の狂いも許されぬ、ベルトコンベアーに乗る者がすでに物になっている。昨夜友人と酒を酌み〝泳げ、たいやきくん〟を唄った時の豊かな表情を忘れるな。時には異性と「エマニエル夫人」の話でも如何が。

出しても入れても郵便局の無表情　樫谷　漫柳

昆虫のように表情のない人間の何と多いことよ。大事な金の出し入れも銀行では機械化されつつある。だからと言って人間が機械になる必要はない。不幸な彼女らにお恵みを。

情熱の火種を雑誌から拾う　川上　富子

枯淡の味もすてたものではないが、人間は人間である。生きているのでなく、生きてゆくために生涯血を燃したい。近頃の雑誌は随分と激しい内容を載せているが、一読一過、二日酔いほどにも到らない。と知りつつ手にする空虚感なのだろう。バラは薔薇で何時までも赤い。

階段に噂が落ちている団地　納　史葉

階段では今日も誇張された対話がある。うっかり本音も言えない。隣りの階段では、すでにあなたの噂に花が咲いている。噂を食べて彼女達はたくましい。疲れた主人がもうお帰りの時間だ。口を閉じた階段は元の静けさに戻る。

エマニエル夫人へたぎる血は持たず　麻野　幽玄

すでに続編が出ている。前回ほどにも人口に膾炙されない。日本人の一過性の故なのか。愛妻家の幽玄君よ、エマニエル夫人など視野に止め給うな。

相性はぴったりだったのが別れ　徳田　水滸

神正館蔵版の暦を妻が読んでいる。今更相性がどうってこともないだろう。お互に喧嘩もできないほど裏の裏までご存じだ。別れるにしても白髪では可愛そうだ。「オイ坂町の天丼でも食べに行こうか」。

人生は復線　会うたり別れたり　樫村ふみよ

映画「旅情」のラストシーンが偲ばれる。駅構内を出た列車が複合したレールを通り、本線へ集結されつつ遠く離れて行く。別離の白いくちなしの花が鮮明に瞼へ焼つき余りにも印象的だった。人の世の縁ほど不思議なものはない。

出る杭を打ってる奴も出世せず　松田　一郎

くだらない奴ほどまま中傷する側に立つ、相手をひきずり下しても、自分の位置が変らないことをご承知でない。杭にもなりたくないが、打ちたくもない反省句。

杭にならないうちに、この稿を終る。

丸潮抄

川村好郎選

湧く雲も流れる雲も風のまま
約束の場所に他人の顔で待ち
せせらぎが嗤う汚染のない誇り
春陽の意地悪　自嘲を誘い出す

和歌山市　西山　幸

鍵束にいつかは叛く鍵もある
自画像がすこし動いた罪だろう
寂しいときに寂しいと書くペンの冴え
すこし図太く人づまの耳を見る
ふり返ると花の泪が分る齢

富田林市　定金冬二

落しても割れない皿は物足りず
放出のキャベツ今夜の主役にし
嫁がせてひと息つけば初節句
久々の雨みな土に吸い込まれ
振り子にもリズム変えたい日のあせり

宝塚市　吉田とんぼ

東大阪市　崎山美子

式間近恋文そっと焼く女
大切な愛に手ごわい敵が出来
草笛のひびきに母のあたたかみ

西宮市　井上のぼる

忘れられた女に風よ　よけてくれ
春の風胸ふくらませ逢いにくる
適令期娘無口の日がつづき
水仙を活け偽りのない春にする

和歌山市　桑原道夫

登りつめてさわやかな汗となり
遠吠えに真冬の月になってくる
けばけばしい彩に自画像なってくる
猫背になって反逆心を抱く

豊中市　安藤寿美子

まだ下手なうぐいすが来て目が覚める
かたくなる土にも雨のあたたかさ
天使にもなれず魔女にもなれぬまま
飢えていた青春の日の恋しさよ

黒枠の妻に不遇を見おろされ
手術着を脱ぐと柔和な目に戻り
ひつそりと初潮を祝うあずき煮る
成人になつたを販売機に告げる

松江市　梅本登美也

郊外へ引越す自由うらやまれ
ゆれうごく心残り火みた思い
寝息耳にして接点が見つからず
不手際へ拍手孤独の中できく

大洲市　宮尾みのり

ハワイ旅行二句

大胆な柄も着てみたハワイの夜
素晴らしいマウイ旅券を賭けている
責任の強いお人と利用され
税金の申告済ませ春の種

寝屋川市　柴田恵美子

ひねくれる程盆栽に付く高値
一歩下る妻を物足らなく思い
心中の鬼にぶつける豆がない
魚哀れ喰われ成仏するとかや

尼崎市　中塚喜甲

愛称で呼んで弔詞のなみだ声
言うだけが無駄と知らない老婆
一年を貯めて二日で使う旅

尼崎市　中谷利美

どん底を知らぬ我が家にチューリップ
春そこに妻変身のネックレス
派手を着て自分を騙すわびしい日

今治市　渡辺南奉

計画を風邪が無惨に吹き飛ばし
取り入れに過疎地も機械の音で明け
いたずらも欲目智恵として映り

鳥取市　平井節子

旅心梅の便りに動き初め
バレンタイン猫もこの日を心得る
石女に五つ児ニュースのせつなくて

羽島市　伊藤静枝

カルダンを着て表情の無い女
ファッションショーに酔う暇もなく野菜買う
八桁の電卓何をはじこうか

三重県　川上富子

亡夫想う夜へ雪　音もなく
夫の忌へ心の傷が又疼き
また疼く心を一人温める

鳥取市　有田鹿の子

みの虫の夢がふくらむ春の風
友一人救えず思案する夜寒
育児日記一寸と笑ろうた事を書き

東予市　小山悠泉

大和高田市　岸本豊平次

広い道歩いて小石につまずいた
雄鶏の早起き近所に詫びて行き
地に還る落葉に風の葬送曲

兵庫県　高橋近江

ヤングから車を取って何させる
金が人追っかけ廻わす金地獄
カー時代歩く不審を犬が吠え

八尾市　納史葉

埋火掘れば火傷をする熱さ
北風の向うにおいて来た慕情
雪しんしん許されぬ愛溜めている

八尾市　田中紀美代

苺摘むこころは乙女の頃になり
民宿の親切富山のくすり出し
負けん気へパチンコ台も負けん気で

和歌山市　樫村ふみよ

入院をさせて一人で聞く夜雨
干し上げた白を染めそな空の青
トンチンカンの耳も平和な共白髪

滋賀県　柚木踏草

清貧の多忙ドラマにもならず
妻の色に咲いた花壇と青い空
ドライな音たてる大仏殿修理

島根県　飯塚虎秋

倒産の社長夫人へ税吏の目
他人には見せぬ強気が妻にあり
もう一度ふり向く墓の細雪

弘前市　小山内貞男

還暦の分を守つた顔の艶
不景気にかかわりもなくバスが混み
客の都度背負って見せるランドセル

今治市　大本バット

年の豆助けて貰う孫も無し
ニコリともせず銀行の清掃婦
老人クラブおんなじ所に同じ顔

今治市　古野伶人

派出所の名刺電話の上に貼り
もう腐る手前で蜜柑甘くなり
スナックの雰囲気僕を寄せ付けず

泉佐野市　大工静子

無意識に優先席の前に立ち
嫉く事を忘れた顔の皺深し
新調に顔合せてる間に陽が西に

鳥取市　勝山紫宏

名前無い賀状の一枚気にかかり
胃袋と対話し乍ら旅三日
年金で食ってる顔と見えぬ艶

羽曳野市　麻野幽玄

一言の嘘の波紋の輪に踊り
親切の度が過ぎて来た長話
パフ叩く女の方は敗けを知る

父母といるしあわせ小さき胸を張り　備前市　武内雅堂

花活けて男の視野に酔うている
エプロンの白で偽装の倦怠期　東大阪市　野村白風

償いを求めず去りし粋な人
仮縫の女心に灯がともり
もてなしは楽この人はサンマ好き　姫路市　大原葉香

誰が為今日の口紅燃えており
節煙を果たした今日の床につく
貧政を笑ってる間も値が上がり　松江市　本庄快哉

鍵掛けて入れるものあり女の子
土地買えば無くなるほどの退職金
歩道橋都会はいやだなと思う　大阪市　欄蘭

ワンポイントずらし婦唱夫随なり
大企業総身に金が廻りかね
大黒柱にしては貧相な亭主なり　岸和田市　池田香珠夫

生きている証しに老いも風邪を引き
駄馬がボスなので駿馬が走られず
栄光の過去に溺れたままに老い　岸和田市　池田露子

聞き捨てにならぬ寝言を言う夫
わたくしの茶漬友達庭の花
再会を信じて胸の火を消さず　伊丹市　樫谷漫柳

ハワイ吟行

土産だけ頼んで見送り先に去に
二世とは知らず片言で注文し
二日目はチップの手付きも角が取れ　新宮市　西尾功

病床の壁の白さへ花を活け
下げるものなくて預金の利子を下げ
安らかな寝顔で妻の寝正月　鳥取県　加藤茶人

発掘へ大古のロマンに賭けた箆
これからが勝負指輪に恥じぬ愛
樟脳の香に触れ幸を嚙み締める　唐津市　三浦ひろ坊

七草を摘んだ河原にもう土筆
財布のひも締めたとたんに底がぬけ　唐津市　山下勝一

葬儀社も倒産ですかと妙な顔
京観世小城と虎屋が追つかける　唐津市　田口虹汀

病気でも唇だけはピンク色
紅梅の横を野立の席ときめ

停年のない紺碧のマイウェイ　大阪市　松本甫久路

煩悩の小さなあかりがまだ残り　出雲市　高見鏡堂

ユーターンしたが似合いの職もなく
開発の裏でないてる渡り鳥　七尾市　松高秀峰

ロッキード子供も覚える程になり
簡単に特技が身につくコマーシャル　鳥取県　大坪天涯

親切な人だが一生賭けられず
一日の区切り地酒を父子酌む　島根県　松本文子

白鷺よ舞え公害のけむる街
秘やかに燃えて一個の石となる　青森県　波ただお

ランドセル子供は夢もソッと入れ
退職をしても六時に目が覚める　島根県　岩田三和

鉄ガラスセメント文化冷たいね
風邪声の方に魅力をもつ女　今治市　和田宏

内幕を知ってくずれてゆく闘志
寝かかった児へ薄情なクラクション　堺市　堀畑日々子

不況の日に鯛焼の長い列
焼芋一個何百円の時代なり　熊本市　有働芳仙

アドバルーン上げて不況へ張る虚勢
一枚の名刺人垣の道が開き　竹原市　大島花炎

闘病で夫婦絆の堅さ知り
年の壁セットで飾る参観日　倉敷市　高山みどり

お見舞が帰ればよけい淋しがり
病院の主になるかも松葉杖　大阪市　牧ときを

老の身は天気次第で気が変り
もう一度にぎりしめたい若い日を　大阪市　藤井天草

梅の花たえた苦労の実る春
泣く孫に今日も負けたかチョコレート　竹原市　鈴木かつ子

倖せを信じて坂を又一つ
無愛想なノレンが招く味の良さ　岡山市　井上柳五郎

白線をひき歩行者はせまい道
妻の留守また集金があわてさす　尾鷲市　渡辺伊津志

邪魔でないから初恋を蔵つとく

無理をして褒めたと知らぬ座の和み
広島県　原田篤史

おてもとに一句つづるも旅の宿
職さがす背を太陽に励まされ
大阪市　平井露芳

契約済売れない家へ貼って見る
売り切れて夢も買えない宝くじ
大阪市　新川貞祐

自虐自慰足して折半する和解
ひたすらに待つことに慣れ老ゆる
堺市　栗本藤持

同病が慰め合うも名は知らず
病む老の愚痴聞かされる日向ぼこ
西宮市　朝山千世子

句に生きて長寿の最後燃えつくす
一芸に打込み長寿保たれる
橿原市　西本保夫

学閥へ人格無視の管理職
管理職そろそろ邪魔にする不況
羽咋市　三宅ろ亭

原色のセーター五十を若返らせ
恋猫の声如月の夜更ける
新潟県　市川一峯

測候所豪雪だけはよく当たり
長生きをしてねと仲村を捨て
豊中市　高橋古啓

薔薇勁し冬の真紅はなお勁し
闇よりもあかりに揺らぐ影こわし
大阪市　堀口欣一

簡単に大臣決まる打合せ
執念をのこし女の平和な死
寝屋川市　江口度

白旗の会社へ赤旗振ったとて
洗濯も食事もブザーが鳴る世相
鳥取市　岸本無人

七人に背を向け屋台でコップ酒
髪染めて出たのに席を譲られる
寝屋川市　福富隆子

かけ込みの便りも出して春にする
二人目を生め生まぬで又もめる
岡山市　時末一灯

逆のこというてさぐりを入れてくる
悲しみの眼に日めくりは大安日
今治市　蔦本昌道

脇役のドラマが僕のすべてです
肯定と否定汚職がすれ違い
八戸市　安田紘

憎しみの果て小さな愛が疲れてる
平等は教育ママの気に召さず
岡山県　池田伴仙

十指みな働き僕の味方する　橋本市　森脇善彦

聖人にも馬鹿にもされず世に耐える

妻にだけ話しておこか羅針盤　橋本市　岩倉天彦

重荷にもなるでしょうねときつい釘

もう一度一旗あげる祈禱料　尼崎市　大垣たもつ

チャンスまだあると信じて喫う煙草

公務員ならば清掃車も辞せず　名古屋市　大林曲ん手

甲斐性ない男にきつい寒の水

願いごと鈴もそんな音で鳴り　山口県　高崎雀声

人並に生き一輪の花でよし

土地だけがあつてホームは夢の中　高槻市　山田スミ子

ホームラン夜空の星のうれしそう

保護色で今日のんびりと生きてゆく　富田林市　中村優

父ちゃんの脱線少しは目をつむり

杵の音絶えて電化の祝い餅　新見市　吉田落猿

振向かぬ計算をして風を切る

吊された鈴が記念の夫婦旅

騙されても承知でついてゆく女房　美唄市　青木仙人

磨かれた石は人間くさくなり

言論の自由がすぎた口をきき　島根県　安達潮音

お早ようと豚が正しくささやいた

故郷の旅せきたてる花便り　尼崎市　駒村岳麗

旅の朝昨夜の女の香が残り　今治市　原田琲珈里

賀状来るだけの絆をつなぎとめ

苛立ちも懐かしくなる退院日　今治市　園部正則

戴けぬ嘘も世慣れの世間面　唐津市　筒井朴竜

兄逝きし頃の桜が咲き始め　尼崎市　小林文月

春一番なにかいいことありそうな　松江市　岡崎雪美

師の碑文晴れの佳き日の除幕式　松江市　黒目大鳥

いつの世も金色夜叉がはびこつて　八戸市　島田昭治

もやもやを薄めて呉れた海の風　今治市　伊藤一郎

今治市　真山国彦

母ちゃんの不機嫌子供腑に落ちず

今治市　今井松花

退けてからレジャーで汗をかいて居る

新潟県　高野不二

買いだめの煙草があってのみすぎる

高知市　竹崎寛

旅ごころずしりと重たい石畳

出雲市　藤井晴月

白髪が一本春の陽にまぶし

唐津市　岩下照沖

食堂車一人に大き過ぎる富士

唐津市　桧垣岩光

炊飯器パチンと切れて妻お留守

唐津市　田中紫浪

私利私欲無いのに親切疑われ

大阪市　伊藤志津

ワイキキの水は日本の味もする

大阪市　伊藤暢人

一月の外人墓地にあるみどり

近作

今治市　**月原宵明**

舟世帯春には春のくらしあり

造反のようにマニキュア塗る女

愛うけて瞳は湖の色に澄み

哀歓の年輪となる皺の数

陽を知らぬ安アパートに詩が無い

大洲市　**米沢暁明**

呼びかける遺影声なし寒椿

通行禁止橋かけ替える風もなし

保育所の子供の好きな赤い屋根

岐阜市　**市川鱗魚**

外れた運妻の荒れた手だけ信じ

D51の愛語も老いの座が浅い

勘忍は老いの袋が耐えている

東京都　**池口吞歩**

晩婚の悔い今更に児の笑顔

これからをどう生きるかに児の笑顔

当にしてならぬと思う児の笑顔

今治市　**長野文庫**

その中に子につけられた皺もあり

買う方はそう思わないみかん安

神棚に埃もあって恙がなし

百人一首と川柳

(22)

冨士野藤馬

六四　権中納言定頼

あさぼらけ宇治の河霧たえだえに
　あらはれ渡る瀬々のあじろ木
（千載集）

定頼は、四条大納言藤原公任（五五）の子である。寛弘年中には侍従右近衛少将であったが、長元二年（一〇二九）権中納言に任ぜられ、翌年正二位にすすみ兵部卿を兼任した。寛徳二年（一〇四五）に五十何歳かでなくなった。右の歌は宇治へ行った時詠んだのである。川柳はそれにかけて、

朝ぼらけ兎道の霧間に又太郎　巨眼（一四〇1）

と足利又太郎の渡河を詠み、

霧晴れにあらわれ渡る膳所の城　蛙柳（一四〇10）

と瀬々と膳所との地口をいい、

定頼は明逃にした大江山　白峨（一二五38）

定頼の顔紅葉する大江山　杜蝶（七八7）

と小式部内侍（六〇）にやりこめられたことも川柳になっている。なお、

小式部が便り尋ねて赤面し　喜柳（一一四20）

も定頼である。

六五　相模

恨みわびほさぬ袖だにあるものを
　こひに朽ちなむ名こそ惜しけれ
（後拾遺集）

この歌は、永承六年（一〇五一）内裏の歌会で作られたのである。

相模は、源頼光の娘と伝えられている。本名を乙侍従といったが、後に相模守大江公資の妻となったので、相模とよばれた。

一品宮脩子内親王の女房として仕えたこともある。夫の公資も歌人であったが、相模の方が歌はすぐれていたというようなところから、二十七、八才のころわかれた。

相模には、情熱的な恋愛歌が多く、また多くの男性との交渉があったようである。

川柳は、いずれも、江戸時代の好色相模女にかけて作られ、

夏相模秋は弁慶冬小町　三箱（一四〇2）
—春三夏六秋一無冬　里柳（三六36）
百人に女二人は好き嫌ひ
—好きは相模、嫌いは小町　多居（一〇五28）
百人一首相模も恋で集に入り　（明八礼1）
千年も前のさがみは歌をよみ　（七26）
百人一首までが相模は恋歌なり　狐声（コリ三9）
やたらさせるのを定家は一人入れ　三交（二九25）
歌仙で見ても下紐を相模とき

また文句をとって、

うらみわび借着のけ出ししみがつき　芋洗（一四〇9）
二三日間がありや相模うらみわび　（七35）
うらみわび袖を見ている五月雨　（武十二36）
こいに朽なん酒樽や油だる　十九丸（一四〇4）

などと詠まれている。

六六　前大僧正行尊（ぎょうそん）

諸ともにあはれと思へやまざくら
はなよりほかにしる人もなし

この歌は、「大峰にて、思ひもかけず桜の咲きたりけるを見て詠める」と詞書して、「金葉集」にのせられてある実感の歌である。

行尊は、参議源基平の子で、十二才で出家して三井寺に居たが、保安四年（一一二三）に延暦寺の座主となり、天治二年（一一二五）に大僧正となった。長承四年（一一三五）八十才近くでなくなった。

この歌に対し次のような川柳がある。

行尊の話相手は山ざくら　意静（八四3）

桜ン坊も行尊が法（のり）の友　ごまめ（一四〇8）

千に武者百には僧の山桜　佃（一〇〇18）

―千載集に平忠度の「さざ波や志賀の都は荒にしを昔ながらの山桜かな」

山桜百にはもれて千に入り　（八二30）

花より外に知る人はなし落馬　長蝶（三三10）

―僧正遍路（一二）の女郎花の歌

六七　周防内侍

春の夜の夢ばかりなる手（た）まくらに
かひなく立たむ名こそ惜しけれ
（千載集）

この歌は複雑な意味があり、その詞書に、「ささらぎばかり、月の明き夜、二条の院にて、人々あまた居あかして、物語などし侍りけるに、内侍周防、より臥して、「枕をがな」と忍びやかに言ふを聞きて、大納言忠家「これを枕に」とて、腕を御簾の下より差入れて侍りければ、詠み侍りける」とあり、この時忠家は、即座に、

契ありて春の夜深き手枕を
いかがかひなき夢になすべき

と返歌した。これも「千載集」にのせられてある。忠家と周防内侍とは、別に恋仲ではなかったが、そのころの宮中サロンの、洗練されたいたずら、じょうだんであったようである。

しかし川柳は、この歌をうがって、

およしよと言はず小声で春の夜の　水鏡（九〇11）

くじられたあとかも知れず春の夜の　白峨（九三13）

と詠み、また文句を取って、

夢ばかりなる手枕に下女はらみ　杜蝶（五九23）

夢ばかりなるかまくらに二三年　柳雨（二三33）

―縁切寺

と作っている。

周防内侍は、平継仲の娘で、本名を仲子といったが、父が周防守であって、後冷泉天皇に仕えて内侍であったので「周防内侍」と呼ばれたのである。その後、後三条、白河、堀河の天皇にも仕え、大江匡房（七三）とも交友があったようである。没年は、天永二年（一一一一）六十五才と推定されている。

周防赤染紫も緋の袴　ゞ丸（一四三16）

赤染も周防も百の緋の袴　綾丸（一二五1）

という川柳もある。

前号訂正―P44下段3の西暦は**「正暦」**

本田恵二朗氏（本社参事）

倉敷市文化連盟賞個人の部に輝く

市文化連盟賞個人の部に選ばれ各新聞に掲載されたり山陽テレビがニュースで顔写真を写し出して放映してくれたり、今朝は山陽ラジオより電話がありまして、二月十四日朝八時三十五分から、アナウンサーと私とが電話対談をするのを生放送することになりまして只今聞かれそうな事項をメモしたりして心浮きうきとしております。二十八日が受賞式ですので、川柳会もライオンズも歯科医師会も式に参加してくれることになりました。

このところスターなみにされまして、毎日電話でよろこびの言葉を頂いております。

昨年渡米して、サンノーゼ市（岡山市姉妹都市）の市長さん（女性―アメリカ唯一の女性市長）を公式訪問して、岡山市長のメッセージを手交しましたが、その市長さんご夫妻と令嬢二人が、十七日に岡山市を親善訪問をされるので、市主催の歓迎レセプションに私も招待をされまして参加します。末っ子の嫁に（高校で英語を教えていた）挨拶の英語のレッスンをさせまして、中学一年生みたいな英語をおぼえ込んで、張り切っております。

愛染帖

正本水客選

一円貨意地でもひろう人を待ち　松江市　梅本登美也
置きぐすり誰がのむとはなしに減り
寿司一つ義理でつまんで女去に　東大阪市　竹中　綾女
核心にふれると霧が深くなる
過去語る女の嘘はとがめまい　竹原市　三宅　不朽
ひとりになると私を噴水が見つめ
雲が現われいよいよまずし昼の月　大阪市　西出　一栄
チューリップ倖せ包む掌にも似て
暖房の部屋にこもりて視野四角　倉敷市　水粉　千翁
南天の真紅に耐えるときまろし
花道があり福豆を浴びる鬼　八尾市　宮西　弥生
火が消えた女に深い海があり
十円で切れるおしゃべり飾らない　高槻市　若柳　潮花

松の葉の雫きのうの雪が溶け
春苗を小鉢へ移すピンセット　島根県　堀江　正朗
酒うまし僕の魚には骨がない
飴玉を置いて出かける市場かご　青森市　工藤　甲吉
精霊が乱舞している牡丹雪
玄関に居留守許さぬ人が立ち　岡山県　池田　半仙
ゴムボート空気に命預けてる
暗い室　真赤なバラを黒く見る　松江市　舟木与根一
ぶかぶかの子の長靴を借りた幸
めりっめりっと冬の星座は音がする　和歌山市　桑原　道夫
トンネルに入ると明るくなる夜汽車
寒波予報女おしゃれに精を出す　大阪市　新川　貞祐
天二物を与えず　胃は強い
ドラマでもゲームでもない安楽死　倉敷市　小幡　里風
魚心水心そんな対話で黄昏れる
あの男　一皮剝いて見たくなり　鳥取市　河村　日満
鈴振って神あることを信じばや
元市議の背巾スイスイ役所ゆく　八尾市　高橋　夕花
寒椿　蝶のやさしさなど知らず
温室に春の言葉が届かない　尾鷲市　渡辺伊津志
飢え気味にしておく才女とも言われ

▽前号訂正△
P34下段11行目―本日休診先生風邪にしてやられ。P47の上段、小浜牧人。（川口弘生氏からご指示）

落葉追う風に夕陽が色をつけ　島根県　小砂　白汀
純情な蝶はまっすぐ降りてくる
桃の花　褪せて白痴の色で散る　富田林市　岩田　美代
冷たさを詠むには桃が咲いている
福は内　古い女の豆の音　東大阪市　竹中　肖二
正確な時計がフット憎くなる　豊中市　高橋　古啓
こめかみに男は地図を折り畳む　島根県　錦織　文子
十指みな生きてる稚児の匂い抱く　滋賀県　柚木　踏草
誘うてみた妻舌出して笑うだけ　八尾市　香川　酔々
山彦に呼ばれる君は善人か　島根県　堀江　芳子
廻転ぶらんこ廻して夫に年がない　大阪市　藤田頂留子
まだまだと枯葉一葉散り残る　小松市　馬場　魚山
他愛なき嘘を信じて女老け　東京都　山根　白星
耳に栓して憎いおとうと　伊丹市　樫谷　漫柳

突出しを見てボラレルと覚悟出来　和歌山市　津田　与史

古時計　馬鹿正直に時を打ち　今治市　和田　宏

どこからか覗いていそう化粧室　岡山県　白岩　文衛

合鍵を探して歩く人生か　尼崎市　黒川　紫香

ひとり来て堪能するほど景に立ち　今治市　原田　一風

同じ巣に住む悲しさはつつき合い　大阪市　欄　蘭

罰当り誰が地蔵さんをはねたのか　岸和田市　池田　露子

ペアの服着ている親子ペアの顔　宝塚市　吉田とし子

頂上へ着けば下りは矢の如し　八尾市　大路　美幸

悪人にもなれず溺れていく涙　今治市　原田琲珈里

詭弁家で相手土俵で勝負する　堺　市　伏見　茂美

自我とおす夜は女を見失い　守口市　羽原　静歩

根雪しんしんわたしが消えてしまいそう　倉吉市　奥谷　弘朗

事なかれ主義に消された新鮮味　今治市　蔦本　昌道

ガラス張りですよと嘘をカバーする　出雲市　藤井　晴月

包装紙解いておんなは満ちたりる　大阪市　松本甫久路

打ち水の凍りを避けて急ぐみち　大和郡山市　森田カズエ

掃除機が吸いこんでいたアリナミン　新宮市　大矢　十郎

また人を信じて人に笑われる　堺　市　高橋千万子

子の入試　天神さんの梅もめで　備前市　武内　雅堂

税務署を笑い黄金仮面ゆく　島根県　榊原　秀子

人恋いのつい独り言する雪つづく　大阪市　宮尾あいき

かれすすき一瞬夕陽へ炎ている　今治市　今井　松花

からっぽの瓣にチューブはピンと伸び　羽曳野市　麻野　幽玄

湯豆腐の白さを昆布がひきたたせ　今治市　古野　伶人

デートせぬ夜は住込み早く寝る　島根県　飯塚　虎秋

ストだけを貶すこたつをそっとたち　神戸市　佐々木静泉

今夜食べたいなと思いしものが並んでる　西宮市　藤村　〆女

美しく老いたし雪の富士ながめ　貝塚市　行天　千代

八十で舞う人もあり老けられず　岡山県　出原　敬一

お手玉に棲んでる里の数え唄　岡山県　直原七面山

作る人にして欲しいわと女から　松江市　岡崎　祥月

早春の湖に小石を投げてみる　今治市　真山　国彦

長生きがしあわせなど誰が決め　東予市　小山　悠泉

貧乏を売り物にして金を貯め　今治市　大本バット

神様と同じ気分にさせる酒　倉敷市　高山みどり

また霙かきくらむほど友の忌よ　八戸市　小泉　紫峰

去来する不安へ匂う庭の梅

薫風編集長からバトンタッチ、これから一年皆さんの句と真剣に取り組んでみたい。速達ですべり込んだ熱心な方も二、三にとどまらず、多少筆を入れても投句者全部の名を出したいとも思ったが、作句教室や雑詠欄の二軍的なものであっては愛染帖の存在価値はないと思い返して全没の人も20名を越した。水煙抄や川柳塔の亜流ではなく各自の冒険を試みた川柳の幅を見せて欲しいと思う。

投句先きは

〒546　大阪市東住吉区湯里町1の25
（電話大阪・703・3046番）
正本水客宛

締切毎月十五日—（一人三句以内）

おシャカさまと川柳

戸田古方

月は四月、日は八日。偶然と申しますか、今日は「お花祭」、おシャカさまのお誕生日であります。「おシャカさまと川柳」という題をつけましたが、おシャカさまの生涯をよんだ川柳やお花祭の川柳を紹介しようというのではありません。（本社句会の柳話から）

おシャカさまといえば、生れるなり立上って、七歩あるいて、天地を指さし、「天上天下唯我独尊」と叫ばれたといわれています。毎年のことですが、子供たちにこの話をしますと、「おシャカさまはお化けですか」という質問がはねかえってきました。

生れてすぐの赤ん坊はねころがって、オギャーというのに相場がきまっています。それに立って、歩いて、こましゃくれたことを叫ばれたというのですから、「お化け」といっても不思議はありません。これはこの偉大なる人物の誕生を祝うプロローグである。この話は人間としてのおシャカさまの誕生とともに、その大精神の誕生、人々に最大の幸福を与えたという魂の誕生をダブラせたものだと説明するのですが、子供たちはキョトンとした顔をしてきいています。

その叫ばれた「天上天下唯我独尊」というおことばを皆さん、どう解釈なさいますか。何の説明もなくこのことばにぶつかると「おれより偉いものはないんだ」といわれるおシャカさまを此上もなく自惚れの強いお方としか理解しようもありません。よく説明されますと、この「唯我独尊」の「我」とは各の生命あるものをさすので、「もろもろのいのちあるものはこの上もなく尊いものをもって生れてきた」となるのです。戦後の日本で、誰も彼もが口にし馴れてきた民主主義の原理に通ずるものがあるようです。二千五百年前のインドの、厳しいカースト、階級制度の中で一切平等の教えを説かれたおシャカさまですから、民主主義に通ずるものがあっても、異とするに足らぬのも当然でしょう。

千年以上仏教とつき合ってきた日本人の心の中に素直に「一切仏性あり」、いのちあるものはみな仏になれる、という考が宿っています。「この上もなく尊いもの」というのはこの「仏性」をさしているのです。

仏、ほとけとは何でしょう。悟れる人ということで普通名詞です。仏性とは悟に至り得る性質ということで、わかりやすくいえば、それを培い、育てれば悟りに至り得る「種」をもっているのだということになります。

それでは「悟り」とは何でしょう。一番短いお経に心経があります。すなわち摩訶般若波羅蜜多心経です。波羅蜜多とは到彼岸、彼岸に至る、苦しみの多い、思うようにならない此の岸を離れて本当の幸せになり得るという意味です。そして摩訶は大きく、多く、勝れたとあり、般若は智慧、この智慧も幸せになるための智慧で、私達の考える知恵とは少し違うようです。心経を智慧のことばともいい本当の幸せになるための大きな、内容の多い、勝れた教えといっていいのでしょう。

心経といえば誰でも知っているのが「色即

初心者歓迎
入会随時
（規則書呈上）
失敗と見せて
奇術の名演技
（春日）
大阪市南区大宝寺中之町一
誓得寺内
関西奇術教室
TEL (271) 七一二八

是空」ということばです。「色は匂えど散りぬるを」の「いろは歌」はその神髄を平易な日本語に書き改めたものでした。

さて「色即是空」ですが、「色」は我々が耳目で触れうる一切のもの、それにしか触れようのない我々にはそれを唯一の本当のものと思っています。だが、それは変化するものでした。あると思っていたものが消えもするのです。そこで「空」ということにもなりかねません。空というとカラっぽと思い勝ちですが、実はカラっぽではなく、あるものがあるのです。何があるのか。夜になって一切が闇に包まれても、私にみえないだけで昼のままの姿がそこにあるように一切がそこにあるのです。空とはそれをさしています。我々はその昼夜に支配されない永遠の存在をみとめずにはいられません。この存在を認る時、我々は不変の幸福にめぐり合うというのです。

おシャカさまの発見されたものはこの空の存在でした。哲学者はこれを「実在」という難しい言葉でよんでいます。

私は昭和十三年路郎門に入って以来、一昨年七月を以って満三十八年、ずっと川柳は単なる趣味や娯楽とは考えておりません。ことに坊さんでもないのに、縁あって、仏教の話をしつづけておりますとこの感じが一層もり上ってまいったのであります。

路郎先生は「生命ある句を」といい残されました。それは人を幸せにする句、実在にふれた句ということであります。

幸せを求めない人はおりません。ではどういう手で幸せが求められるのでしょうか。その幸せは行詰るものであってはなりません。

毎日何の不足も感じない人はまずないでしょう。思うようにならないことに出くわした時どうしてそこを抜け出すでしょうか。本当の幸せを得るか得ないかの決め手はその切り抜け方にあるのです。

おシャカさまは抜苦興楽ということをいっていられます。苦しみを脇へやってしまってその苦しみ代りに楽しみをもってくるのではなく、苦しみという味をそのまま楽しみに変じていくのです。

川柳するものは自らを客観化することによって、苦しんでいる自分自身を冷静に眺めえられるのです。川柳こそは正に抜苦興楽の詩です。しかも自らを幸せにするだけではなくその作品に共鳴し得る全ての人々を心から幸せにし得る魅力をもっているのです。

川柳はお互いの身近かなもののなかから作られています。実在云々なんて聞き直ったものの、いい方はすこしもせずに、そのもったいぶらない中にじわじわとゆるぎない燻し銀のような空の世界に触れてきて、この人間不信の世を乗り越えて人間を信じられる人間にしてもらえるのです。それが川柳するものに恵まれる功徳と思いつづけております。

不二田一三夫著　（4月30日発行）

『川柳寄席』　価・二千円　送・著者負担

（本誌と同じサイズ・表紙カバーの句は久米奈良子氏筆）

序文・秋田実先生

内容／寄席の句／新聞や雑誌へ書いた寄席関係の雑文／夢路いとし・喜味こいし、海原お浜・小浜の漫才台本／若井はんじ・けんじ、上方柳次・柳太のディスク・ジョッキー／ほか／路郎賞候補作品／秀句鑑賞に出た句／本社句会で天位になった句／（川柳雑誌から川柳塔までの選句や句風の変遷がわかり、新人諸氏のご参考になれば幸甚―著者）

―「川柳寄席」の表紙カバーは芝居や寄席の定式幕の柿、黒、萌黄の色を使われたそうで、そういえば不二田様の服の色はオリーブ、スポーツシャツが黒、ズボンが淡い茶色という定式幕の色です。自作自演の「川柳寄席」の開幕が楽しみです。

（小谷葉子）

発行所　〒544　大阪市生野区勝山南一―一四―一七　漫才作家くらぶ

（本社でもお取次ぎします）

春は大萬川柳大会から

回を重ねて第23回大会

昭和51年2月15日　午後1時

会場　割烹大萬

三年連続トップの藤岡花梢さん

年によっては寒い日もあった。しかし「大萬川柳大会」が来ると、もうそこまで春が訪れる。今年はなんとしたことか18度という暖かさで、正に陽春の季候だ。

65名出席という盛会である。路郎先生ご在世のころは40名で盛会だったことをおもえば好郎氏の努力、投句者の協力がここにまで実を結んだのであろう。

例によって例の如しとは、この記事のタイトルも司会から閉会の辞まで、そっくり毎年そのままである。

まず開会に先きだって、司会栞氏は遠来岡山の西山朝二、香川の三井酔夢、篠山の遠山可住三氏ほか、奈良、和歌山の常連も拍手を浴びて紹介された。

世はロッキード事件で引っくり返っていたが、ここ大萬会場は黒い霧どころか、透明な心と心がふれ合うところ「大萬川柳大会」の集いである。

開会の辞の多久志氏はベストテンの作家はときどき変るが大会スタッフは毎年同じだとまず満場をやわらげ、多久志氏は39年度に一回だけベストテン入りしただけだが、梅里氏は毎年ほとんど第一位で押し通した偉大さを賞讃された。

二代目（松江克美氏）が謝辞に立たれ、故梅里氏の多趣味に挑んだが〝商い〟の魅力にひかれ趣味の方はどうにも不在になる。これからは趣味の方も〝あきない〟ようにしたいと、きれいなオチをつけられた。

さて、生々庵主幹の柳話である。主幹はこの大萬川柳大会には非常に意欲をもやされ、昨年も今年もご生地の〝葉隠れ〟の武訓を提げて登壇。

〝命ある句〟の〝いのち〟とは何か—を、故春巣氏の「大坂城」から、故椙元紋太氏の、句に命のあることを考えるだけでも楽しいことではないか—と、故路郎先生提唱の〝命ある句〟とうまく結ばれ、今年も満場を魅了された。

大萬川柳のクィン藤岡花梢さんは三年連続トップ。ベストテン表彰は例年よりも拍手が大きかった。

河内天笑氏の席題「負けん気」から披講がはじまる。松下梁水氏欠席で薫風氏が代選したほかは選者に変動はなかった。

全題完了。あとは〝川柳塔一座〟の演技者がノドをウデを披露する。

トップは奇術の村田瓢太氏。これはホンモノの妙技だ。天笑、美幸、つき子、可住、酔々、百酒諸氏の美声につづいて、お待ちかね香川の三井酔夢さんが「住吉」を舞う。これもホンモノ。さすが名取の日舞である。

松崎町界わいが夕やみに包まれるころ、大萬川柳大会第23回目の幕がおりる。

（ペン・一三夫—カメラ・岳人）

第二十三回大萬川柳大会

――三才と軸吟は次の通り

兼題「執　念」　藤岡　花梢選

千年の執念みせる大賀蓮　幸生
百度踏む執念こはぜ切れていた　弥生
執念に生きた命に詩が生れ　修史
執念のその引金がさびている

兼題「次　席」　藤井一二三選

次席だよ昇格だよと左遷され　翁童
やっときた次席に暗い社のニュース　花梢
定年の土産の椅子にある次席　雀踊子
エリートの次席に揺れる回り椅子

兼題「　笛　」　橘高　薫風選

口笛は俺の心へ俺が吹く　朝二
口笛を吹いて屈辱耐えている　保夫
笛の声みんな言葉を忘れてた　小松園
蕭々と月さしてゆく笛の声

兼題「売り出し」　大路　美幸選

極楽の土地一坪も売出され　酔々
売出しへぜんまい切れたような雨　小路
男を売出す朝は大きな欠伸する　道夫
神様の売り出し恵方縁結び

兼題「禁　酒」　飛田　好一選

禁酒した胸に誓いの金バッジ　儀一
禁酒もうぐらついている旅の夜　美幸
禁酒する苦心へ下戸は笑い出す　柳宏子
禁酒した日々の喜びかみしめる

席題「山　彦」　遠山　可住選

過疎の村山彦だけは裏切らず　寿子
山彦が気楽に返る山男　修史
山彦となって我が子がついてくる　千寿子
山彦もいつしょに若い父となる

席題「負けん気」　河内　天笑選

負けん気が又すかたんをして帰り　つき子
負けん気の女は絵馬に字を書かぬ　酔々
父の無能負けん気だけをたたき込む　可住
税務署へ来て負けん気を引っ込める

筆のすさび

八木　摩天郎

◎堺商工会議所報に毎月川柳欄は本社主幹中島生々庵先生選で大好評であるが、それと双璧として並び称せられて読者を嬉ばせていた郷土史家松本壮吉氏、文、岸谷勢蔵氏、画の「堺あれこれ」は一三〇回をもって完結、本年二月号より「堺古事記」として私が執筆、岸谷画伯の絵を配して随想を掲載、益々日々多忙になりそう。

NHK国際ラジオ放送に日本の歴史に堺を取上げ自由都市として栄えた当時の堺の史実並びにその史蹟に関する取材の為め二月十四日末、堺取材班と同行、各所を案内、南宗寺を始め鉄砲製作当時の工場跡、屋敷の状況等視察。桃山時代の経済都市、文化都市の一面を近くNHKの電波にのせられるとのこと

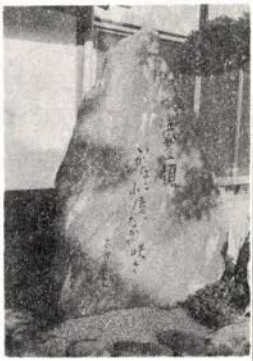
◎大正の初期。堺大浜公園に大毎主催全国学生角力大会があり、全国大学、中学の優勝は学生生徒の血を湧かせたもので、マラソンの人見絹枝も健在で会場に姿を表わしていた。その土俵の東隣りに菊人形館があったのも知る人が尠くなって来た。菊人形の嚆矢七段返しの名優の似顔清涼飲料水の出店等賑わせたが、その菊人形館に全国初めて手を染めた乃村工芸社初代社長乃村泰資の事業を同社々誌に編纂『七〇万時間の旅』として上梓掲載する事になり、取材に東京より来宅、当時を追想して談合、話し乍らも、われも老いたり六十三年前ごろの話〃お白粉の下は光蔭矢の如し〃の誰かの川柳のよう。往時を追懐いずれ近く発刊の様子。

堺の町名を詠った「堺石つき唄」も後世に残すと同時に宴席の人にも知って貰う意味で乞るるままに、丸三とアトラス喫茶に執筆。絵は岸谷画伯を煩した。これも年寄のひや水ではある。

川柳塔社同人のシンボル・マーク

女性作家のもあります

一個千百円（送料共）



浜昼顔いかなご小屋のなかで咲き

明石・浄蓮寺の句碑

大井正夫

句碑を見てもらう正夫の顔の艶』川柳年鑑（東京・雄山閣刊）関係の、黒川笠子さんから句碑披露川柳会の前日拝受した句で、同じく前日、拙居へわざわざ来て頂きお祝の心くばりを賜わった。前田芙巳代・定金冬二の両氏に深謝、うれしかった。

信州産、縦2米×横1米2×巾半米、重量約2屯の自然石、磨かずけずらず趣きのあるざらつき苔もそのままの石面へ、「浜昼顔いかなご小屋のなかで咲き」大井正夫、この十九字を刻り、明石市林の浄蓮寺の庭に建てて頂いたのは昨年末もぎりぎりの29日だった。

句碑の寺で三月七日、明石市川柳協会主催で披露句会を催して頂き有難く深謝、涙がでた。各地から地元から、全国川柳大会の顔ぶれほどの有名川柳人が多数ご参集たまわり、こっそり、ないしょのつもりが派手なことになってしまったのである。お知らせをするとご迷惑？でもあり、案内状を各位へお届けするのを差しひかえたが、六十余名のご来会。当日の新聞朝刊の句碑写真づき四段記事を見て知ったと川柳人でない旧知が数人来て下さって会場つづきの座敷から句会風景をのぞき視して、なごやかな雰囲気が感銘をあたえたらしく嬉しさと懐しさ無限であった。

川柳会を今だ見たり味わったりしたことのない山妻や伜・娘その家族孫らも会場外の庭から眺めていた、その眼に、大井正夫の川柳生活がどううつったか、驚ろきと印象が彫み込まれたことと思う、が、さてどうか。

初め独自で句碑を建てましょう、と発案して下さった大阪の奥本唯然さんに寺の庭さきで山妻がお礼を申上げると、「勝手気ままな男の一生の守りに苦労されますね……」痛い言葉をつい耳にして四十余年の友情をしみじみ感じたのである。有難く頭を下げた。

石に刻む句に濁点をつけてはならないとか古来の仕来があるらしい。新旧漢字もややこしい、誰にでも読み易くすることを本意として、わが趣みも含み、落款も、大井正夫と雅号本名兼帯で、石原青竜刀さんが電柱に花が咲いたようなサインだ、面白いよと言った、そのままを刻り込んで貰った型破り、建立までの一切の支出は句主関係がなく動かず、石彫五十年という老職が、こんな下手なぶ格好な字、彫ったことがないと言いつつ数日かかって手ぼりで仕上げ、さて、この自然石にぴったりの字だと賞讃したと開いた原寸紙に句を書いたのと、先祖からの寺の庭と決定しただけ、こんな有難い句碑創りは今までに数少いのでないかと思うと涙がでたのである。

東野大八・堀口塊人・増井不二也の三氏が拙者のアラをばらし、森口一風が建立までの経過報告を話して呉れた。紅寿・月南・夢詩朗・言也その他先輩にお話をして頂きたかったのだが時間がなくお許しを願った。三条東洋樹・福永清造・中島生々庵の三氏に、浜・昼・顔の三題それぞれ選をしていただいた。

小浜牧人

大声で浜は働く朝となる
切り札は出さぬ真昼のネオン塔
顔たてる話を廊下の隅できめ

樋口舟遊

清水拓味

各題最優秀句三句に東野大八さんが提供して下さった陶芸茶碗を賞に贈り貰って頂いた。

六十年来の良友？、兵庫県短歌協会事務局長の木村栄次さんが飛入りで来会、二人の昔話しをしてくれた、想い出が多い友情です。

お心くばりのお祝を各位より賜り、祝電を14通拝受し有難く深謝し恐縮しつづけた。

橘高薫風さんから、「大人おめでとう」、〝早春の明石あかるし句碑が建ち〟と。東京の藤島茶六さんから「句碑建って明石名所がひとつふえ」祝電拝受、お尻がこそばゆし。

元憲兵少佐だった

福井多蘭子氏逝く

不二田一三夫

福井多蘭子さんが、ここ数年、体調をくずされていたことは知っていた。

二月の上旬、奥さんの俊美さんから、51年12月23日午前11時15分、大阪日赤病院で脳血栓のためご逝去の悲報がもたらされた。（享年六十三歳）

自安寺が会場だったころ、お嬢さんと一緒に出席された多蘭子さんと会ったのが、ぼくとしては最後になってしまった。

物静かな中に、何かピンと張り切ったものを持っていた多蘭子さんだった。それもそのはず、昭和八年選ばれて近衛歩兵二連隊に入隊、少尉に任官、十二年奈良歩兵三十八連隊から支那事変に出征、北支中支方面を転戦、活躍。とくに中隊長として武漢三鎮攻略のときは、大別山において、その勇壮なる大突撃は当時の新聞に大々的に報道されたものである。この赫々たる武勲は御前講話にも浴したという。今なお大東亜戦誌に残りその論功により殊勲甲金鵄勲章勲五等瑞宝章に輝いた。

昭和十六年関東軍五七四部隊第三中隊長として鞍遼陽に駐屯、厳寒のソ満国境の警備の重責を果たし、後年川柳を愛する人柄は当時の部下からも慈父のように慕われたものである。氏は野外演習がもっとも得意だった。当時の山下奉文、梅津征四郎、畑俊六各閣下から破格の賞讃を受けたというから、たぐいまれなる青年将校だったようである。

昭和十九年には陸軍憲兵大尉として、内蒙厚和分隊長として治安維持に貢献し、その功績により徳王から、蒙古勲章功一級を授かり二十年には北蒙司令部付となり少佐に昇進、勲四等瑞宝章を授かったが、同年八月終戦。そして戦犯の死刑の序列に加わるのである。ここでドラマなら前篇が終る。

しかし多蘭子氏の人柄は、特に中国語が堪能だったため、乞われて蔣介石から教官として選ばれ、戦犯としての死刑はまぬがれたのである。その後は筆舌に尽くせぬ苦難の末、二十一年七月に帰還。ここから趣味の多い社会人となる。

日本生命の上六支部長、心斎橋支部長を歴任、その間労働組合執行委員長となり現在の日生労組の基盤を創るなど、とにかく実戦型の人だった。

出光興産特約代理店から、大阪石油共同組合長などで活躍したが、四十五年ごろから病いを得て、貿易を主体とする福井商事株式会社代表取締役から同社会長となり、趣味人として今日に至るのである。

〝多蘭子〟という雅号に興味をもち、一度〝雅号ぶっちゃけばなし〟にご登場ねがうため原稿依頼したように思うのだが……（ご病気中だったのかも知れない）

戦後、東洋蘭の育成に専念し、中国愛蘭会の会員となり、新種、または逸品の賞などを受け、特に三十八年には〝一茎九花十本立、土佐紫寒蘭〟が天覧に浴すなど、ここに雅号が〝多蘭子〟となったようである。

青年時代は尺八をよくし、号は〝銑山〟というのだそうで、非常な多趣味だった。

句は気が向けば投ずるというタイプであった。酒を愛したそうだが、酒の句も、蘭の句もあまり見かけなかった。自分を表面へ押し出すことがお嫌いのようだった。

川柳塔初登場は創立第三号（40年12月号）

—毛染薬の名を教え合う寺詣り

—公園でひとり味わう子沢山

年間、数回より出句がなかった。

—ハイウェイ下手が上手を避けてゆく

—禅堂に気配でひとり居ると知る

—税務署が新装なって活気づき

奥さん（俊美さん）からのおたよりでは、

—**人はみな青天井の下に住み**

が遺句だったようである。

—合掌

新入社

宮口笛生選

新入社まとも不況の余波を受け　仙人
過激派が顔を拭って新入社　香珠夫
長髪も切ってやる気の新入社　正則
給料日迄は買えない新入社　松花
新入社母が磨いた靴で来る　国彦
親会社から天降る新入社　バット
新入社みんなお偉い人に見え　七面山
老妻のネジで二度目の新入社　本蔭棒
倒産するとは知らぬ新入社　祥月
新入社もう組合が眼をつける　水客
出勤簿きっちり捺して新入社　紫香
新入社やる気の背広四角張り　紘
末席へまずは親しむ新入社　善彦
新入社社運の響く中にいる　右近
すぐ話題撤き相な娘が新入社　与史
新入社うるさい奴を先ず覚え　昌道
チャームポイント話題をさらう新入社　里風
当分は素顔で通す新入社　保夫
ハイハイと素直な学卒新入社　朴竜
芸達な新入社員の歓迎会　紫浪
新入社我が家でどっと出る疲れ　岩光
OLに坊やと呼ばれ新入社　素身郎
新入社野球部からは期待され　木魚
新入社自信なさそな電話口　千翁
返事だけはっきり言える新入社　芳子
新入社祝う桜も三分咲き　芳子
初サラリー切らずに戻る新入社　正彰
零成長人ごとでない新入社　奇童
新入社社長の心へ遠く居る　みのる
小卒の訓示へ大卒かしこまり　竹馬
新入社コースは違うおん曾子　萬的
作業衣にからだを合わす新入社　弘生
新入社小さな波紋なげただけ　肖二
先輩がみんなやさしい新入社　南奉
叱ったら泣くかも知れぬ新入社　洋々
合格にしたのは来ない新入社　佳
新入社先ず春闘に狩り出され　軒太楼
新入社個性を隠す社服着る　宵明
口紅が次第に濃くなる新入社　潮音
当分は胼かじりながらの新入社　漫柳
OLに値踏みされてる新入社　敏
やがてストする顔でなし新入社　一風人
訓示聞く新入社の眼が澄んでいる　地どんたく
明日からは社歴を刻む新入社　天代仕男
新入社良き先輩に見守られ　軸

スピーチ

松川杜的選

スピーチがライトを浴びてから狂い　宵明
青年の主張日本は大丈夫　暁明
スピーチを聞けばりっぱな御両人　道子
スピーチで爆笑させる婦人科医　一風
スピーチを聞けば離婚のない夫婦　茶人
スピーチの順を定める寄付の額　国彦
スピーチになって補聴器そっと当て　バット
スピーチの祝辞は体ごと祝い　白水
大臣のスピーチ本音がちと覗き　本蔭棒
マイクなどいらぬスピーチが引きつける　紫香
スピーチに義理のないのが箸をとり　紘
貫録のスピーチ弥次を黙らせる　与史
スピーチはみんな美人にする新婦　昌道
七人の敵へスピーチだけが武器　里風
似たり寄ったりのスピーチ続くまた続く　貞祐
スピーチへ満座芽出度い顔となる　近江
僕の言うスピーチ先の人が言い　可住
披露宴選挙の匂いする祝辞　みのる
ちときわどい話もスピーチ馴れている　万的
原稿は秘書がつくった祝辞なり　芳仙
不真面目なスピーチ次官の首がとび　正則

箸割って待つスピーチがまだ続く　香珠美
生む数にふれてスピーチしめくくる　登美也
スピーチの途中へ秘書が耳打ちし　松花
スピーチに許可が要ります赤い旗　季賛
スピーチへ女将も喋る二、三分　潮花
スピーチを何処かで借りて来た通り　秀峰
スピーチを仲人口に似せておく　潮音
スピーチは下手だがビールつぎ廻り　天彦
花嫁の母のスピーチ身にしみる　紫宏
スピーチへ司会者時計を又ながめ　どんたく
スピーチのテープが形見になりました　肖二

佳

スピーチの少しあがっていて楽し　水客
三分間スピーチ家宝にしています　善彦
スピーチの順がそこまで来た動悸　カズエ
雨空も褒めてスピーチ如才なし　岩光
スピーチへ父大声で泣けるなら　南奉
スピーチが活字を拾うようになり　千翁
忘れてた恋をスピーチ呼んでくる　奇童

人

サボテンの真紅魔王のスピーチか　照沖

地

再婚のスピーチ短かく切り上げる　道夫

天

褒められる程花嫁の母淋しがり　千寿子

軸

母親のスピーチ頭を下げるだけ

四月バカ

黒川紫香選

四月バカほんまの辞令渡される　宵明
四月バカうっかり孫にかつがれる　登美也
四月バカまじめに聞いてる顔もあり　甫久路
瞞されたとも思わない四月バカ　落猿
冗談もうかつに言えぬ四月バカ　寿子
ニヤニヤと出勤を待つ四月バカ　伶人
ぼんやりの癖に知ってた四月バカ　松花
ホステスも客も遊びの四月バカ　一郎
母ちゃんはすぐ騙される四月バカ　バット
四月馬鹿のん気な事言うとれず　季賛
考えてみれば成る程四月バカ　七面山
だまされた嘘持ち歩く四月馬鹿　潮花
ムキになり収拾つかぬ四月バカ　漫柳
四月馬鹿デートの電話かけてみる　水客
四月バカ女心がゆれ動き　思月
四月馬鹿電話があまりうま過ぎた　潮音
女事務なかなか乗らぬ四月馬鹿　天彦
かかったのが必死になってる四月馬鹿　不二
軽妙な嘘が嬉しい四月馬鹿　春日
変人をだましてこわい四月バカ　昌道
もててもてててほんに今宵は四月バカ　どんたく
四月バカハイミスだけは放っとかれ　保夫
騙しても本気に怒らぬから騙し　紫浪
四月バカ通じぬ婦警の瞳が涼し　踏草
腹立てる訳にもいかず四月バカ　芳子
善人が乗せられたまんまの四月馬鹿　正彰

優

ママと娘がフト茶目ッ気の四月バカ
四月馬鹿今日も無策のまま暮れる　弘朗
女の方がよっぽど図太い四月馬鹿　萬的
栄転が本当だった四月バカ　弘生
気まじめな父が洒落言う四月馬鹿　肖二
親友の範囲でためす四月バカ　三和
四月馬鹿うっかり本音吐いちまい　代仕男
四月バカ騙されそうなのがひとり　茶人
嘘をつく女と女の四月馬鹿　のぼる
四月バカわからぬ妻で物たりず　秀峰

佳

四月バカでしょうと母は先手打ち　国彦
四月バカ知ってて掛る忙しさ　秀峰
朝のうち気をつけていた四月馬鹿　本蔭棒
四月バカ何も起らず日が暮れる　道夫
四月バカ誰もだましてくれなんだ　寿美子

人

どうしても瞳が笑うてる四月バカ　与根一

地

本当に怒ってしまった四月馬鹿　みのる

天

少々はうるさい孫の四月バカ　無人

軸

四月バカぽっくり死んであわてさせ

初歩教室

題 ―「愛」―

本田恵二朗

書道展愛の一字のさわやかさ　紘
（書道展愛の一字が笑みかける）
距離おいて叱りつけてる父の愛　同
（襖越しほどよく叱る父性愛）
二人三脚愛のリズムへ乗って行き　同
（二人三脚愛のリズムに狂いなく）
失なってはじめて知った母の愛　鐘堂
白杖の人に愛護の手をのべる　同
（白杖へ愛の手添える土手の春）
家裁へは恋愛夫婦ばかりくる　日々子
美人でも無愛想はいけません　同
（美人でも無愛想では頂けず）
愛称で呼んで呼ばれて新家庭　利美
作家には飯の種です愛と恋　同
（愛と恋それが作家の飯の種）
愛情をたしかめたくてすねてみせ　同
（すねてみて愛たしかめるうぶな恋）
せせらぎも愛の讃歌となる二人　幸
（せせらぎが愛語の伴奏してくれる）
愛聴いて小さくゆれるイヤリング　同
（愛語聞く耳にゆれてるイヤリング）　藤持
愛の糸幽明隔てまだ続き
（愛の糸幽明隔てて握り合い）
孫達の人気愛称で呼ばれてる　静子
（愛称で呼ばれて孫ら人気者）
愛くるし隣の三年生おじぎする　同
（愛らしいおじぎ隣の三年生）
一瞬の愛でも欲しい片思い　柳五郎
愛してる言葉とならぬ目のぬくみ　同
（言葉にはならぬが愛の目が温い）
愛称の由来は言うまい恥しい　慶彦
感情が先走りした愛の鞭　同
（感情がつい先走った愛の鞭）
愛しさが日増しに日記厚くする　紀美代
（愛しさが日増しに日記埋めてゆく）
愛の芽はあの日の出逢い気づいてた　同
（愛の芽は出逢いの日附知っている）
愛小さく大きくゆれる交差点　伊津志
愛深く潜行さして色変る　同
（愛深く深くにじんだ彩である）
愛嬌の良さ営業へ廻される　保夫
心境の変化離さぬ愛読書　同
（愛読書こんなに心境変えてくれ）
愛してる云わぬが妻の食べさせよう　昭治
（妻の愛僕の味覚を知りつくし）
鬼教師の愛の鉄拳なつかしく　同
振り上げたこぶしに愛が詰めてある　度
どん底に居て愛情のある救い　同
（どん底で本当の愛情拾い当て）
日記帳開けば愛がこぼれそう　同
天かける愛千里の道も遠からず　同
（愛語たつぶりポストへ急ぐうぶな恋）　那智子
はなやいだ理想を捨てて愛に生き　同
無器用の上塗りをして愛逃す
（テクニックを知らぬあわれさ愛逃す）
見えぬ糸の愛にたぐられのめり込む　同
（目に見えぬ愛情の糸がからみつき）
亡母の愛六十路過ぎてもなつかしく　忠吾良
包む愛星の如くに静かに居　同
（星のような静かな愛と対座する）
愛芽生え少年殻に閉じこもる　洋子
海が好きという少年愛に飢え　同
（水平線見つめる少年愛に飢え）
別居して愛の確認する夫婦　同
（協議別居して愛の彩塗り直す）
愛などと云うには枯れた夫婦仲　露杖
（共白髪の枯淡の愛の美しく）
胎動に愛のたしかさ噛みしめる　同
（胎動と語るひとときの愛たしか）
ラブレター乙女のままの胸で生き　寿子
あなたの香愛の泉となる安堵　同
（倖せな愛の泉へ夕映える）
愛すればこそ気にいらぬことも云い　正則
埋れ火の愛はいつしか燃え上り　同
（埋れ火の愛春風が吹き起し）
屋台酒愛想の味でおかわりし　岳麓
（屋台酒愛想の味を添えてくれ）
愛の巣狭いが人形と鏡据え　同
（愛の巣に人形と鏡狭くいる）
求愛の矢を放ちたい朝を出る　落猿
（求愛の矢を放ちたい春霞）
成功が教えてくれた愛の鞭　辰江

無口でも父には父の愛があり　同
（目の色に無口な父の愛を見る）　同　貞祐

産声へ家中揃うた愛の的　同
（産声を愛の視線がとり囲む）　同　弘生

十字架にほんとの愛を教えられ　静枝
草花に傾く愛は孤独にて　同
（草花に愛語を問うている孤独）　同　サヨ

五ッ児へ両親の愛とまどいぬ　三十四
（五ッ児が愛の配分とまどわせ）　同　同

嫁く夜に父の愛胸を刺す　同
（父の愛が胸に刺った嫁ぐ朝）　同　同

かくまでに人を獣に愛の記事　大成
中年の愛がどろどろ崩れる日　同
（中年の愛が崩れる春の雨）　同　瓢太

汝が愛の苔なら風よ受けて立つ　同
（風雪にもう負けないぞ愛の苔）　翁童

愛一つ抱いて女は耐えている　同
愛情が受験場までついてくる　同　無人

（母性愛が立ちつくしてる受験場）　頼次
愛しさが物言う言葉つまらせる　同　道夫

（愛してるから口ごもり口ごもり）　茂美
平等に愛したつもりへ子の言分　同　同

愛しさは孫の笑顔に娘の笑顔　静泉　同　功

一筋の愛はわたしの命とも　同
（一筋の愛を命の綱とする）　同　同

永遠の愛誓う日に嘘はない　同
（とわの愛誓い合う日の青い空）　同　漫柳

信じてた愛レールからはずれ　同
（信じてた愛のレールがきしみそめ）　同　同

やがて春の土の愛より萌えるもの　文子
不信をも愛は変えゆく底力　同

（不信さえ解かす大きな愛である）　同　江水

罪深い心に愛の灯をともし　同
（罪深い心に愛の灯がともり）　同　貞祐

古里を愛して訛抜け切らず　同
骨までは愛せず後添いもうもらい　同　無人

近眼の女が読んでる恋愛論　同　道夫

愛憎を越えると他人になる二人　同
反抗期愛の鞭とは感じない　同　功

なぜ死んだ愛のアルバム色あせる　同　同

誤字当字だらけこれでもラブレター　同　瓢太

愛情は小鳥のこころにさえ通じ　同　漫柳

飼ってやることが小鳥への愛なのか　同

財布もう打算の愛につきあえず　同

書いて消す愛だんだんと草書体　同　貞祐

星霜の小皿に盛った愛一つ　同

割れ易い小鉢に女愛を盛り　同　弘生

愛のみを言うて不貞へ黙秘する　同

褪めるから愛を云わぬのも男　同

倖せな人生愛される妻でいる　同　同

片言の憎まれ口の愛らしく　サヨ

愛憎の空しさ土に帰えるとき　同

愛情の深さを計る尺探す　同

題―醉―四月二十日締切（六月号発表）
宛先　倉敷市下津井一―九―三四〒七一一
本田恵二朗

75年世相川柳考

本多柳志

い　医師会へ勲一等の鼻ぐすり
ろ　老優は消えずに若いのを娶り
は　はがき代上げても利子は下げてくれ
に　日本の頭脳あちらで培われ
ほ　北方の島は寒いか　ほほかむり
へ　偏差値という妖怪になやまされ
と　通さねば通して見しよう値上げ案
ち　長髪を切って列んだ安定所
り　リブ号は太平洋の波を切り
ぬ　ぬけ道は市会議員に教えられ
る　累卵の危さ石油基地に住み
を　沖縄へ海の未来を見に出かけ
わ　わが党へ得な世論はよく聞え
か　カタカナで書けば売れます化粧品

（P55へつづく）

第二百九十七回（五十一年度第三回）

大萬川柳

「ムード」入選発表

選者　川村好郎
投句総数　六百五句
入選　七十二句

ムードから生まれた恋と気がつかず　今治　有里

その先はムード次第という二人　貝塚　つき子

間違うて手を握りたくなるムード　堺　天笑

真白い辺にムードが盛ってある　富田林　花梢

ムードなどいらぬ男のコップ酒　堺　憲祐

ムードより銭民宿を撰る若さ　堺　一二三

ムームーでハワイ四日のムード着る　和歌山　千寿子

司会者もムードに酔うた喋りすぎ　大阪　柳宏子

ホームバームード出しても妻は妻　今治　純平

野良犬も春のムードにポーズする　和歌山　道夫

一流のムード値段に目をつむり　西宮　百酒

春うらら番の蝶にあるムード　大阪　儀一

追い打ちのムード茶の間へメロドラマ　寝屋川　小路

床柱が消えるとムード変るなり　笠岡　古庵

アベックへムードを添える月が出る　倉吉　弘朗

知らぬ顔してる二人にあるムード　倉敷　健二

お茶の間のムードは明るい母の彩　大阪　君子

ムードに弱い人へ愛の目離せない　大阪　弘生

雰囲気に溶けぬ一人で座が白け　和歌山　幸

団体をぬけてムードの湯につかり　羽曳野　幽玄

ティバックムードで替る味を出し　鳥取　秋女

わが家にもケチケチムードの波が寄せ　大和高田　江水

よく笑う女でムード湧いてこず　神戸　要保

打ち明けるムードにさせた月明り　東予　悠泉

押せ押せのムードで建てた壁が剝げ　岡山　一灯

ムードなどいらぬ老人食べるだけ　大阪　蘭

新婚のムードに鏡掛け映える　松江　快哉

落し穴知っててムードに飢えている　大阪　柳信

附和雷同ムードに押され挙げてる手　大阪　貞祐

解散のムード株価にはね返り　取鳥　洋々

別宅のムードに従う赤パジャマ　ヅカガール見おろすムードで若返り　宝塚　静馬

孫が来て孫のペースとなるムード　最高のムードで恋を弾ませる　大阪　好一

解決のムードへ生花美しい　仲人の瞳にまとまると見るムード　大洲　暁明

法廷のムードへ誰か咳ばらい　日の丸を出すと平和はムードです　松原　史好

特売のムードに女もう酔うて　ムードなどどうでもソロバンづく　でゆき　松江　晃男

合鍵を握ればムード消えそうで　めぐり逢うムードに話題が切れて いた　八尾　弥生

ムード絶頂理性の糸が切れそうで　はなやかなムードへ財布が喋り出す　富田林　維久子

教会のムードに善人らしくなる　妻ある日ムードを変える髪かたち　八尾　鬼遊

不機嫌なムード無心を又にする　懸命に生きてムードのないくらし　泉北　春栄

冷え切ったムードへ猫も割り込めず

みんなの暮しが明るくなる
セキスイのプラスチックス
積水化学
本社　大阪市北区宗是町1

好きというまでのムードを探り合い　藤寺井　美房

団らんのムードがうれし鍋料理
ムードよし頃合いもよし安来節　守口　笑風

有線が流すムードで飲んでいる
コーヒプラスムードイコール３０
０ＹＥＮ　神戸　どんたく

妻や子を一寸忘れていたムード
二三本追加をさせているムード
手拍子で下戸もムードの中に居る　倉敷　筒子

留守買うて孤独のムード味う気
お招きへムードに合わす舞扇
せっかくのムードをこわすトラが
出て　大阪　一栄

入学式のムードをこわす赤い旗
あの夜のムード心にしまう丈の恋
味よりもムードに足が向く喫茶
ささやかなムードのれんに首を入れ　佳句

妻の居るムードは朝のみそ汁に　桜井　雀踊子

回れ右させる屋台のもつムード　寝屋川　小路

不況風忘れる職場のいいムード　奈良　保夫

新婚のムードへ鸚鵡唖となる　名古屋　曲ん手

からませた小指にムードのまわり　和泉　洛酔

道　人ノ句

もみ消されそうなムードの黒い霧　和歌山　富子

地ノ句

母の日のムードも母が作ってる　和歌山　道夫

天ノ句

国会のムード国民不在なり　藤井寺　吸江

ぬうむらなねつそれたよ

横文字の土産を買えば日本製
タレントの墓場となった参議院
連休は悲しからずや子沢山
卒業をして制服がほしくなり
使い込み農協は驚かず
寝袋で一千万の夢を抱き
成れそうもない主任制度へハタを振り
来年の予測へ眉につばをつけ
無駄使い叱る会計検査院
内げばのように野党はけなし合い
イギリスを売り込むクインスマイルス

あてえこふけまくおの

農協につとめＯＬくらを建て
おふくろの味を都会へ喰べに来る
苦労したゲリラ　ゲリラにもつてかれ
安売りのビラへ集る団地族
マンションも米も売ります百貨店
献金へつけて差し出す値上げ案
不況克服お経のように称えられ
こそ泥は挙げ三億はつかまらず
エベレストヨットラケット婦人年
貞操も金も貢いで罪になり
アメリカの陛下ご機嫌けんぴ鏡

すせもひゑしみめゆきさ

裁判に勝って気になるコンコルド
協力をさされて線路歩かされ
油送船怖いマラッカさけられず
目玉焼だけでお嫁に行くつもり
道行けば危いビルの窓がらす
審議ストやっても処分ないと見え
映倫も見たいポルノはほつとかれ
ピアノ娘に習わせ団地住みにくし
もう一度行って見たかろランブイエ
赤軍はこと思えば又あちら
スト八日処分賠償後遺症

請求書も置かずすごすご去ぬムード　松山　与根一

昭和五十一年度ベストテン（二月現在）

選者　吟

一	道夫	七、〇	和歌山
二	百酒	六、五	西宮
三	幸	六、〇	和歌山
四	筒子	六、〇	倉敷
五	吸江	六、〇	藤井寺
六	蘭	五、五	大阪
七	多久志	五、五	西宮
八	小路	五、五	寝屋川
九	牧人	五、五	神戸
一〇	美幸	五、〇	八尾
一一	維久子	五、〇	富田林
一二	花梢	五、〇	富田林
一三	静馬	四、五	大阪
一四	好一	四、五	大阪
一五	天笑	四、五	堺
一六	洋々	四、〇	鳥取
一七	利美	四、〇	尼崎
一八	与根一	四、〇	松江
一九	露杖	四、〇	鳥取
二〇	鬼遊	四、〇	八尾
二一	君子	四、〇	大阪
二二	暁明	四、〇	大洲
二三	冨子	四、〇	和歌山
二四	憲祐	四、〇	堺
二五	つき子	四、〇	貝塚
二六	道子	三、五	大阪

以下略

昭和五十一年度第五回「ふんぎり」五句以内

締切　四月二十五日

第六回「驚く」五句以内

締切　五月二十五日

投句先

〒593　堺市堀上緑町一―三―七
藤井一二三方　大萬川柳係

柳界展望

（原稿締切毎月末）

▼生々庵主幹は三月七日の「大井正夫の句碑のある川柳会」へ出席。翌八日は主幹ご夫妻共著「生々楽天」の刊行記念句会と、相変らずご多忙である。三月十六日から金婚を記念して開かれた画廊カワチの句画展も連日盛況だった。

▼第六回紋太忌川柳大会は4月11日。会場は神戸木材会館5階大ホール（兵庫区兵庫郵便局隣）50年度ふ賞発表、同紋太賞発表。兼題―開く・筆まめ・雑誌・縁・誘う・原稿・顔ぶれ・不思議―会費五百円（投句辞退）主催・ふあうすと川柳社。なお同誌の全人抄は増井不二也、田中好啓氏が各六ヵ月連続選。雑草苑は定金冬二選、新苑抄は泉淳夫選、真珠園は山本芳伸選の三氏が毎月交替で担当。

▲川柳研究社年度賞表彰第四回川柳大会は五月十六日正午から、中央区新富町一―一六―八印刷会館で開催。出席者の宿題は―公平・追加・潤い・善意・明日・坂道。投句者の課題は―浮かぶ・大地・ひとり・鬼・灯・虹投句料三百円。締切四月三十日。投句所〒113東京都文京区根津1―5―21吉岡宵波宛。

▼第二回愛媛川柳研究大会は5月16日（日）午前10時から今治建設会館（今治市北宝来町2丁目）「今治駅より徒歩一分・今治港より徒歩15分」題は―朝・まっすぐ・帯・打つ・ねじ・影・音・薄着・―各題2句―席題二題の予定（当日発表）投句は句箋裏面に記名の上5月13日までに大会係へ。会費は八〇〇円（参加記念品・昼食・発表誌共）賞・今治市長賞以下十五位まで主催・汐風川柳社

▼第27回新潟県川柳大会（第7回川上三太郎賞・第2回白石朝太郎賞受賞表彰）各題2句―題は―白旗・墨・冷凍・雑詠―小野為郎・同―大野風柳選―講演・堀口塊人―席題4題―投句は300円同封・6月5日締切で〒956新津局私書箱15号柳都川柳社。その日は6月13日。その所は新潟市幸西3新潟会館スワンの間。さんか賞千円。懇親会は大会終了後・二千円。

▼さいたま三月号に「垂井葵水遺句集」評を篠崎堅太郎氏が二ページにわたって執筆。

▼川柳大阪四百号記念句会が3月20日1時から大交会館で開催。生々庵主幹・栞副主幹・薫風編集長の選に「川柳展示会」があり盛会

▼対流△一行詩型研究△7が3月1日発行・季刊・川柳人と俳人の合同誌である一部三百円、送料百四十円〒170東京都豊島区北大塚1丁目33―4森林書房。

▼東野大八氏（美濃加茂市）が某日ひょっこり来阪、一三夫氏と歓談一時間で帰られた。

▲大井正夫の句碑を見てやろう句会が明石市の浄蓮寺で開催。氏は日川協の常任理事・事務長として活躍されているが、交遊関係が広く、その日3月7日は盛会だった。「冊子を作る、習慣や約束ごとに従わず、勝手気ままに作った私家版です」明石海峡百句」大井正夫著に堀口塊人氏や東野大八氏が祝筆を寄せられている。その非売本を出席者に贈られた。型破りの編集が大井正夫さんらしい味を出している好著。

▼山上千太郎氏（元本社同人）2月16日逝去。謹悼

▽同人の動向△

▼本田恵二朗氏（本社岡山参事）に倉敷市文化連盟賞が贈られた。表彰式は二月二十八日午前十時から倉敷文化センターで行われ、テレビやラジオ、新聞などで引っ張り凧。こんとこタレントなみですと。お祝い申します。（鷲羽川柳会長として地域の文化発展のため大きく寄与した）

▼川村好郎氏（高石市）は生々庵主幹のあとNHK川柳の選をされているが「水煙抄」とぶつかった時は一八〇〇句もあり多忙を極わめたとのこと。

▼菊沢小松園氏（大阪市）のご長男に長男が二月十五日に誕生。―璧玉二つ忘れず九番目が生まれ―小松園

▼尼緑之助氏（出雲市）から―一月二十四日をもって会社を引退しましたが翌日から風邪。老妻も風邪で一時は重態でした。身辺の整理がつき次第「川柳」に打ち込みたいと思っていますと。

▼堀江正朗・芳子ご夫妻が三月四日NHKのローカル放送で川柳日記が紹介された。

▼出原敬一氏（岡山県）は「清流社」の副主幹として活躍されている。月例句会も盛会で誌上川柳大会も企画しているとのこと。

▼橘高薫風氏（豊中市）経営のマンションにこのほど喫茶部開店、連日盛況とのこと、お祝い申しあげる。

▼清水一保氏（鳥取県）から―地元の東伯川柳会も毎

アリナミンA
お役だていただくために タケダ
肉体疲労時・妊娠授乳期・病中病後のビタミンB1補給、神経痛・筋肉痛・腰痛・肩こりの緩和。
☆1日、1～4錠を、1～3回に分けて服用してください。☆説明書をよく読んで正しくお使いください。☆25ミリ錠のほかに5ミリ錠。
武田薬品工業株式会社 〒541 大阪市東区道修町2-27

月例会をもち、川柳教室等で川柳普及につとめていますと。—柳魂を目覚めと春風呼び戻し—一保。

▼黒川紫香氏（尼崎市）から—三月五日から五泊六日の予定で水客君と北海道へ行きます。句画集刊行記念に欠席、生々庵先生によろしく。

▼三宅不朽氏（竹原市）から—体調は好調です。早く元気になるようガンばっております。

▼柳楽鶴丸氏（松江市）が3月8日来社。一三夫、岳人、葉子さんが久しぶりに氏を囲んでの茶ばなし。そのまま句会に流れこむ。

▼山内静水氏（竹原市）は静養中の身ながら生々楽天刊行記念句会へはるばる出席された。

▼山田季賛氏（高槻市）から—二月十九日に再手術します。一日も早く全快して皆様とお会いできる日を楽しみにしています。

▼藤村〆女さん（西宮市）から—また三島へ来ています。富士は相変らず真っ白です。—美しく老いたし雪の富士ながめ—〆女。

▼川柳わかやま吟社から寄せ書拝受。

▼越智一水氏（今治市）から第9回四国ブロック川柳大会の寄せ書拝受。

▼福井多蘭子氏（大阪市）は50年12月23日に大阪日赤で脳血栓で逝去。享年六十三歳。この追悼記事はP49に。謹悼。

▼羽原静歩氏（守口市）の長男の奥さんである奈津子さん28歳が三月四日逝去。遺児に二年一ヵ月の長女、生後一ヵ月の長男があり、哀悼。—二児守る蓮のうてなに春の風—静歩。

新同人紹介

横地正彰（よこち まさあき）

—小松園・南柳—推薦

▽各地の句会▽

▼菜の花句会は4月10日（土）午後6時から西郷会館（八尾神社境内）で開催。近鉄大阪線八尾下車南へ歩約一分。兼題—桜・泊る・浮く・鳩・席題二題（各題五句以内）投句は適当な句箋に一枚一句、裏面に雅号郵券百円同封。投句先〒581八尾市高安町北一丁目二五。大路美幸宛。

▼堺川柳会は4月12日（月）午後6時から八木摩天郎居で開催—兼題—試験・明日・決める。

▼南海川柳会は4月15日午後6時から南海電鉄本社食堂内で開催。題—積み残し・一割・耐える。

▼南大阪川柳会は4月20日午後6時から松崎町三丁目大万で開催。題—独断・工作・深い・あきらめ。

▼川柳東大阪は4月24日（第4土曜日）午後6時から東大阪市中央公民館2F第二集会室で開催。兼題—新築・味・試めす・ウトウト席題二題当日発表。会費三百円（投句は五十円切手三枚同封）投句先—東大阪市下小阪七の一一—竹中肖二宛。

第9回 東洋樹川柳賞贈呈川柳大会

第9回東洋樹川柳賞は「川柳展望」の時実新子氏（姫路市）に決定。

日時　五月二十三日（日）十二時

会場　兵庫県民会館 特別会議室（11階）〒650 神戸市生田区下山手通四丁目五七—四

兼題　「小説」田中好啓選
「流行」森中恵美子選
「先頭」大森風来子選
「絆」福永清造選
「予言」中島生々庵選
「峠」三条東洋樹選

講演　各題二句（欠席投句受付けず）席題二題・当日発表

会費　「私の来た道・往く道」時実新子五百円

賞　知事賞・市長賞・教委会賞ほか

主催　時の川柳社

本社三月句会

「生々楽天」刊行記念

会場　金属会館
八日　午後六時

句画集「生々楽天」刊行記念句会。生々庵・小石ご夫妻を祝って他社の方々もかけつけてくださった。栞氏の開会の辞と祝辞から晴れ舞台となる。主幹のご挨拶や多久志氏の柳話はスペースの都合で次号の特集号を飾ることになったが、川柳塔一家のなごやかさは会場いっぱいにあふれていた。

松江から柳楽鶴丸氏、広島から山内静水氏がご出席、拍手の中で紹介された。

祝電は川柳塔まつえ・藤井明朗氏・堀江正朗・芳子ご夫妻ほか。深謝。

この記念すべき三月句会の月間賞は和歌山の野村太茂津氏にかがやいた。

（次号は生々楽天特集号）

進行・西田柳宏子—記録・高杉鬼遊

出席—与呂志・静水・重人・敏・武雄・正彰・太茂津・与史・千寿子・滋雀・多久志・今雨・摩天郎・天笑・蘭・葛城・岳人・鶴丸・一三夫・瓢太・右近・美幸・柳志・栞・喜一・信一・眉水・肖二・綾女・静馬・凡九郎・水京・修史・古方・柳宏子・維久子・一舟（三月も出席）誓二・六竜子・酔升・喜風・史好・寿美子・吸江・形水・川狂子・花梢・薫風・不二也・左久良・雀踊子・茂美・文秋・言也・夕花・美代・史葉・鶴声・喜美子・百酒・十郎・千梢・ゆきを・いわを・恵美子・千万子・生々庵・度・好郎・牧人・漫柳・笛生・一二三・頂留子・あいき・君子・古啓・鎮彦・酔々・恵美子・鬼遊・弥生・庸佑・つき子・小松園・儀一・葉子。

席題「夫婦」　柳楽　鶴丸選

くい違う夫婦に育つ子沢山　鎮彦
円満な夫婦敷いたり敷かれたり　敏
夫婦仲よすぎてもめる日のだるみ　川狂子
年とった夫婦に別なお茶の味　摩天郎
夫婦して来た金策を断れず　十郎
お揃いで寛美が好きな指定席　不二也
一合の酒に夫婦は丸くなる　森中恵美子
夫婦の何であるかを寡婦わかり　あいき
夫婦喧嘩別れる気などさらになし　眉水
夫婦ずれ名ばかり若く落ちつけず　川狂子
子に見せる夫婦喧嘩は妻が負け　与史
別れても後がないから夫婦耐え　文秋
ちょっぴりと奥さん上位で良い夫婦　形水
髪染めて中年夫婦のしらじらし　生々庵
夫婦だと自覚した日は他人めき　漫柳
茶柱へ夫婦の思いくい違い　わきを
檻の外から夫婦の絆見守られ　天笑
しみじみとなって夫婦とけてくる　花梢
中年夫婦妬心などない面構え　生々庵
夫婦とも云えず夫婦の素振りする　いわを
夫婦でも言えない言葉繰返し　文秋
あきらめか延長のまま夫婦老い　正彰
偉そうに言うてて妻を胸に抱き　柳宏子
苦難のり越えた夫婦の目がきれい　百酒
荒っぽい言葉で通う夫婦愛　度
仲の良い夫婦へすきまあけにゆく　つき子
似たもの夫婦でハミングまでもよく似てる　小松園
別居してから夫婦らしくなってきた　酔々
夫婦もう家系に触れぬ齢になり　岳人
夫婦とはこんなものかと湯に入り　いわを
凡夫婦梅の香りに身をまかせ　夕花
夫婦です喧嘩もします梅桜　一三夫
カラカラと造花が嗤う倦怠期　友人
消えぬよう心で囲む夫婦の灯　君子
友引きの朝の夫婦にある喪服　岳人
紅生姜夫婦の中に置いてある　森中恵美子
とび出した核の夫婦はバラ色で　雀踊子
鍵穴へ夫婦が戻る音になる　美代
そんな日の夫婦で沈黙の茶漬　眉水
冷えてきた茶の間は夫婦の交差点　美幸
地をくぐり天に和したる夫婦笛　美幸

席題「浮き草」　増井不二也選

浮き草を動かし鯉の恋進む　一舟
浮き草に駈足をして春が来る　弥生
浮き草の根をからませている安堵　柳宏子
浮き草が下手なオールにたたかれる　寿美子
浮き草が釣糸邪魔する位置に浮き　百酒
鮒昼寝したのか浮き草動かない　静馬
小波に揺られ浮き草よく眠る　柳宏子
浮き草に風と水との詩があり　百酒
浮き草に似た人生ヘネジを巻く　修史
浮き草の流転を共にする敦い　武雄
浮き草の細い根金魚にひっぱられ　儀一
きれいな虹をいつもみている浮き草で　天笑
浮き草は都会の水に住み馴れず　生々庵
浮き草は浮き草同士手をつなぎ　千梢
ふり出しにもどって浮き草根を生やし　一舟
浮き草となってネオンのすみで生き　喜一
転勤の転勤これも浮き草か　今雨
浮き草の疲れた顔でふたり連れ　生々庵
浮き草となって笑いのない男　喜一
浮き草の暮らしに馴れて派手に生き　喜美子

疲れきった男に浮き草みつめられ　君子
有為転変浮き草に似た半生記　水京
生きるだけ生きてる私も浮き草も　古方
学令の児へ浮き草の旅つづく　滋雀
浮き草のまたふる里を遠く棲み　一二三
聖書手に浮き草暮しに明け暮れて　左久良
浮き草の根も下ろさせる人が出来　鶴声
地に足をつけよと浮き草から言われ　千梢
浮き草の流れつくまで人を恋う　森中恵美子
浮き草のたどりついたは矢張り故郷　喜美子
浮き草の女を泣かす守唄　史葉
宮仕え浮き草稼業に似る辞令　眉水
浮き草の悲哀に肩を寄せて生き　武雄
出稼ぎのこの浮き草に子のありて　鬼遊
浮き草の俺に妻子がしがみつく　君子
松舞台いつか踏む日の旅枕　滋雀
浮き草の身にどの家の灯もぬくし　夕花
転々と職変えさいはてへ流れ　不二也

兼題「絵」　小浜　牧人選

放牧の絵に忘れていた童話あり　幸花
絵にすれば狸あんがい面白く　潮
子供の絵どこさがしても罪がない　若芽
日本の心一とすじ墨の色　水車
生々楽天果の果なる来迎図　美幸
絵心が夫婦の詩に彩を添え　弘生
裸婦の絵は殊更恐い顔で見る　右近
絵心がたのしい旅にしてくれる　喜美子
絵にならぬ夫でもよしついてゆく　つき子
中ピ連のデモ絵にならぬ声を出し　一二三
絵に描いたようだと少しほめすぎる　今雨
嘘の顔鏡の奥へ描く女　武雄
絵ガラスの裏でわたしの詩を捜す　夕花
幸福を絵にする少年石を画く　岳人
ささやかな庭も絵になる春の彩　肖二
絵にされる舞妓の姿うしろ向き　文秋
渓流の岩が絵になる姿もつ　不二也
スモッグの街を絵にする雪が降る　あいき
執念の画伯に山容またかわる　静馬
奉納の絵馬も古びて子は育ち　生々庵
青空へ彼女の似顔描いてみる　好郎
一芸を極めた貌は絵にもなり　百酒
絵に描いた倖せだから逃げないよ　修史
自画像にいつまで青い色を塗る　古啓
人生の絵筆がちぴたまま余白　頂留子
許されたた罪は押絵にして残す　弥生
絵日傘を斜め乙女の顔まるい　言也
絵離へ桃活けて乙女を忘れない　形水
倒産の瞳に先代の肖像画　儀一
安静のベッドに静物画を愛す　不二也
地獄絵の裏には鳩を画く女　酔々
点景となり絵日傘が往く青田　栞
子供の絵大人のウソを突いている　史好
絵はがきのように夕陽が今沈む　柳志
倦怠期夫の絵筆乾いてる　史葉
マルセルの絵に殺されることもある　森中恵美子
四捨五入して自画像の描き足らず　千梢
絵筆洗えば恋も流れそう　史好
人生の下絵ばかりを溜めて行く　滋雀
偽りを描く絵筆なら持っている　史好
満ち足りた心で絵具皿を洗う　雀踊子
裸婦の絵に大人の嘘がかいてある　古啓
一枚の絵を塗り潰し妻になる　夕花
嫁がせて明日からどんな絵をかこう　笛生
画用紙に一パイ一年生のお母さん　幸生
河童の絵があるうまい酒がある　森中恵美子
絵に描いたリンゴ澄した顔でいる　牧人

兼題「生」　橘高　薫風選

生き生きて清し御二人金婚の　みどり
まだしたい事が山ほどある余生　幸太郎
再手術生きるに耐える事にする　季賛
魂の生れ替りて見る世界　若芽
松風に生きざま聞いている茶室　太茂津
生き残るつもりの店をぬり更える　柳志
夫に子につかえて余生一人ぼち　あいき
塵塚に芽生えて育つものあり　寿美子
生死など明日は解らぬ人の波　茂美
生きるため多少汚れた手もつなぎ　右近
定期券あと二週間生きられる　栞
借用書生きて証拠をつきつける　漫柳
生と死の間を埋めている虚飾　百酒
四畳半生きる暮しのこの温さ　千万子
タイムカード生きてることを忘れさせ　一三夫
おんな四十瞬されても生き抜くや　眉水
生きてゆく台詞を今日もまたとちり　鬼遊
生きていることの一つに酒の味　幸生
生き延びて人間不信の雀です　弘生
したたかに生きる女の眉細し　夕花
髪を切って五月の風に生きている　武雄
今日生きる野良犬同士争えぬ　不二也
生気潑剌プライドをもち続け　静馬
生々流転いまだに的がしぼれない　道夫
螢の生命少女の掌に移る　一栄
人生のカルテの余白スクラップ　漫柳
生々流転警察の入口で　凡九郎
自分だけ生きてる様な生き様だ　古啓
浮く力沈む力のある生命　一舟
生きているのが天王寺の鐘をつき　森中恵美子
生鮭の淡紅色に人を待つ　好郎
一片の椿に生の重さ聞く　酔々
冬滝の凍って生を貯える　鬼遊
妻と社長にあやまりながら生きている　史好
踊り子の誇り裸で生きている　度
限りある生へ雨の日が続き

生きてゆく人それぞれを抱く朝日　好郎
終章で生きたい欲を持ちはじめ　幸
老妓なお生きる力の撥を持ち　潮花
聴診器潮満ちる音生きている　太茂津
小便を風に散らしてこれが生　薫風

兼題「踊」　菊沢小松園選

ストリッパー踊り狂って腹がすき　登美也
一生を踊り続けて行く夫婦　柳信
百までを雀と共に踊らんか　どんたく
市長との質疑値上げが踊り出し　日満
踊らせる順番がある舞台裏　弘生
銃口の前でも君よ踊れるか　水客
家元の腰から下は生えたよう　水車
風に踊る花びら野望捨てている　幸
型どおり踊って広目屋金にする　軒太楼
蛸踊り仕事と別な腕を持ち　洛酔
見物も心うき立つ阿波踊り　一栄
おかぐらに心は神にまかせきり　祥月
踊るだけ踊ってあとは飲むと決め　季賛
かずら下踊りの汗がにじんでい　潮花
本当の恋へ踊りの手がにぶり　若芽
本当のファンが踊る勝ち戦さ　紫香
リモコンで踊らされてるひとりです　幸太郎
舞扇持てば傘寿の腰が伸び　一三夫
見る阿呆も踊りたくなる阿波踊り　酔升
鏡獅子舞台狭しという動き　今雨
昼の顔塗って舞踊の蝶となり　鶴声
家元の足袋の白さに古稀を舞う　水京
踊って飲んで淋しさ消えもせず　千梢
踊り子の足ばかり見るかぶりつき　迷路
出稼ぎが酔って踊れば故郷のもの　吸江
春の笛に踊らぬ裸木すねて見え　生々庵
娘の踊りお土産つきで観てもらい　百酒
一生を庶民という名で踊らされ　与史
笛吹けばそろばん弾いて踊らはり　誓二
盆踊りやっぱり選挙顔を出し　重人
母の悲話秘めて踊子町を去る　弥生
快い踊りに女を匂わされ　肖二
黒幕へカンカン踊りなら見せる　鬼遊
裸踊りがおはこになってるとは妻知らず　多久志
正直に阿呆で踊る顔になる　滋雀
踊りの輪抜ける二人に闇がある　史葉
踊りの輪抜け出た二人見てた月　一三夫
盆踊り小っちやな恋を見失い　柳志
冷戦へ鍋の豆腐が踊るだけ　寿美子
足元へお師匠はんの眼が光る　形水
ラインダンス今年も春がやってきた　史好
人間国宝という踊りの手　今雨
黒幕は人を踊らすコッを知り　庸佑
倖をかくし切れない踊りの手　維久子
踊り度く無い日もあろうに舞台の娘　綾女
あやしげな踊りみんな酔うてはる　庸佑
ほんとうの阿呆も踊る阿波踊り　鬼遊
これからも夫の笛で踊るかな　夕花
裸踊り男をしかと見てもらい　武雄
ただ身体動かすだけの娘の踊り　千寿子
血圧を気にして踊る阿波踊り　多久志
家中で過保護の孫に踊らされ　あいき
舞扇もてば凡人とは見えず　花梢
いつしかに打算の中で踊らされ　君子
見ておれず師匠座ったまま踊り　十郎
阿波踊り見てる阿呆にして呉れず　喜風
脚光の中に人生を踊りぬき　生々庵
善人を踊る阿呆にしてしまい　史葉
旅ひとり踊る阿呆になるもよし　森中恵美子
夜明けまで踊りきれいに掃いて去に　左久良
美しい踊は心も舞っている　千万子
母を恋う踊子にある千の鈴　弥生
家元の差す手引く手にあるゆとり　小松園

兼題「天」　川村好郎選

満天の星が滲んでくる慕情　幸
晴れ曇る浮気な天に委す旅　幸太郎
海碧し天に邪心のないかぎり　幸生
天に鼻向けて天狗はいばらない　岳人
安楽死などと天寿の外にいる　維久子
天の声などと政治家のたまいぬ　一三夫
天の声もう倒産にたじろがず　水京
天高し二浪返上させた春　つき子
天寿などわからないから夜が眠れ　弘生
星と語る星の言葉が亡母になる　花梢
いい星が見つかりそうで天仰ぐ　美代
天の怒り猿知恵どもの騒しさ　生々庵
時々は方向音痴になる天使　史葉
天無言気儘にビルが伸びたがり　喜風
天地神明に誓って国会で嘘をつき　鶴丸
天の声権力の座に聞えない　形水
天罰は小物にばかりふりかかり　史好
寝連ろんだ春天匂う地が匂う　笛生
天の川きれいに見えた左遷の地　庸佑
この辺で折れたらという天の声　千万子
運を天にまかすと努力しておらず　一二三
天国のあなたへ嘘のない暮し　維久子
下積みは天職などと割切れず　静馬
うたがいを天の碧さに恥じている　花梢
逆らえば天の怒りか水の刑　弥生
天に星我が営みの孜々として　不二也
天の恵みしかと雑草受けとめる　夕花
天の声地の声しきりまだ迷い　武雄
少年の夢は天を突き抜ける　君子
天の声探せば足下にころげてた　太茂津
我執くずれやっと聞えた天の声　好郎

（河井庸佑・整理）

▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。十七字以内の句に、下三マスに雅号。

川柳わかやま　野村太茂津報

掘ればまだ湧き出る泉信じょう　与史
若水は遠く蛇口の音を聞く　芳童
不死鳥の如く奇蹟に生き続け　福水
雑草にも打ち水をして寝正月　英子
冗談をまにうけている意地悪さ　武雄
乱舞して雪束の間の夢を見る　幸
お年玉ママの背からも手を出させ　ふみよ
若水を汲んでる夫の別な顔　和子
氏神も正月という顔で待ち　千寿子
添書きに真がこもる年賀状　としよ
初詣去年の無事に手を合わせ　京子
黒豆の味に自信を配る母　まさ枝
最後まで自惚れ通して見たい恋　寿子
ゆとりを持ってライバルの賀状読む　道夫
自惚れがあるから人間だと思う　那智子
自惚れがシャネルをつけて自惚れる　天彦
乱れ酒醒めて夜明けの氷雨聞く　喜誉司
乱れ髪女の執念押し通し　恒治
乱雑な部屋にロマンの夢を飼い　善彦
大丈夫らしいまだ自惚れを持ってはる　凡九郎

どんぐり川柳会　谷垣　史好報

火矢放つ女に夜がまだ明けず　弥生
歯をむいた猿へ人間本気なり　鬼遊
父は子が本気になるを待っている　薫風
結局は夫婦にもどる夜が明け　好郎
議会答弁本気でないと故郷で言い　瓢太
冗談で探る本気が見破られ　百酒
ゲーラカイトに負けぬ奴凧の本気　酔々
打ち明けた日から他人の顔でなし　吸江
哀れさは本気におんなだけが燃え　一二三
産んでいる亀に非情な夜が明ける　幸生
どっちもが本気どころか命がけ　儀一
本気でっせ握った手と手の血が通い　万里
明け初める街に足音しげくなり　敏雄
寒参り夜明けの風に小さくなり　重夫
老夫婦うそも本気もない生活　サヨ
明けてゆく空へ昨日は考えぬ　美幸
家元の襟許寒く年明ける　小松園
一夜明けたら改めて腹が立ち　史好

川柳東大阪　竹中肖二報

多少なら持っていますを当にされ　小松園
多少とも気があるらしい目の動き　凡九郎
立志伝多少の嘘も書き添える　文秋
多少の犠牲はと大臣の事もなげ　十止庵
パチンコへ多少いかれた顔でゆく　度
タイミング合す歩巾の息がきれ　好一
タイミング悪いと女に目で知らせ　誓二
通勤へ日々ピッタリのタイミング　儀一
ユーモアの見本みたいに見栄を張り　古方
ふところがいつも淋しい見栄を張り　肖二
見栄でないセールスマンの身躾　喜風
としよりと見られとうない髪を染め　正彰
偶然を仕組んだらしい合せ方　綾女
働けば偶然と言う運があり　鎮彦
もう笊かぬ同士でぬるい茶をすすり　美幸
特効薬あきらめましたカツラ買う　あいき
せんぶりの特効薬は疑わず　三十四
母さんのチチンプイプイすぐ癒り　柳宏子
偶然の顔ぶれ病人気を廻し　一栄
弱腰の夫にタイミング良い助言　右近
タイミングはずして明日を考える　季賛
妬いているくせに本心のぞかせず　柳信

いずも川柳会　板垣　草丘報

童心にかえる街角見当らず　叮紅
思案していて街角で怒鳴られる　可保留
全力の汗さわやかにインタビュー　芳子
街角の別れ人目をはばからず　明朗
腹に子を宿す深さを知り慌て　逓児
情深い女が土佐の唄歌う　晴月
罪深い女十字架負いつづけ　きみえ
ポケットのメモはめでたい春拾う　虎秋
ポケットに小銭ジャラ〳〵酔うている　独仙
ファッションポケットの位置を変えていき　正子
ポケットを妻は刑事の目で探り　正朗
鍋に蓋似合う夫婦の三十年　春稍
やっと貴方に似合う私になりました　文子
衿足が着物の似合う人にする　郁生
似合う思うから悲しいロングヘア　あきら
門衛にまだよく似合う過去の髭　河南
お似合いと賞められている貸衣裳　軒太楼
Gパンも晴着も似合う娘に育て　恵治
ポケットのマッチ昨夜の行状記　快哉
気のつまる別れ街角から走り　緑之助

川柳塔まつえ　岡崎　祥月報

二級酒よありがとうあすも働ける　洋々
珠数たぐるひとときの我が身置き忘れ　芳子
言いあって侘しさだけの陽が暮れる　正朗
限りある命だと知る枯葉散る　早苗
日照権太陽強くうなずいた　虎秋
饒舌の友が言葉をはさませず　敏子
みんなみんな過ぎた夢だと墓のいう　鈴子
もの好きがおって道具や金になり　酔夢

他人の花掴み取る鋏かくし持つ　巡歩
採点をすればするほど自己嫌悪　ミツコ
計画も二人で立てる共稼ぎ　澄水
赤坂で練る計画で政治する　鳳人
有難や在庫一掃した寒波　愚童
不況に追打ち寒波荒れ狂う　軒太楼
発つ朝の妻梅茶を添えて出し　雪美
ワッハハハ計画又崩れ　鶴丸
ご意見を賜る計画伸びなやみ　孤呂二
居坐りの不況へ寒波あぐらかく　逝児
酒ぐせと知らず本気に腹を立て　町紅
円満な酒ぐせゴロリ寝てしまい　新雪
寒波襲来日本列島寒稽古　晃男
朝発ちの空が気になる霧が込む　祥月

川柳高知（高知市）　川竹　松風報

夫婦して言葉失う子の口調　海州
十二月せめて白菜だけは漬け　窓花
豆辞典片手にさがす虫眼鏡　其梅
大声でどなる親父は機嫌よし　運幸
乙女らの噂の渦に僕がいる　泰章
裁かれるように女に詰よられ　松風
鍵かけてから思い出す忘れ物　勝子
忘れたい心の傷がまた疼き　楠恵
忘却をしたい人より旅に出る　亀甲
空いている筈新婚の予約席　芽十
式場の予約来年のをもう済ませ　十面子
初雪の予約の客へ湯のけむり　柳翠
訪米の陛下うれしい両国旗　紀人
日の丸の波お立台手で答え　暁耕
行幸の片手へ紙の旗の音　鹿寛
日章旗飾られている程売れず　紘雨
クリスマス七面鳥の哀しい日　一二三
クリスマスバーですませて来た夫　甚吉

南海電鉄川柳部（大阪市）　辻圭水報

来年はよいことあろうか十二月　摩天郎
十二月昔の夢が忘られず　宏子
十二月また日めくりをたしかめる　儀一
間違いの電話が頻な十二月　千万子
忘年会もボーナスもない十二月　維久子
湯の宿で悠々紳士十二月　川狂子
十二月せかせかできる身がうれし　圭水
手不足の限界を知る十二月　柳信
倒産首切悲しい記事の十二月　徳子
無視をした基本に伸びぬ駄句を練り　正彰

川柳じんぐう　十郎報

集金へごくろうさんと言うゆとり　武雄
うまい嘘くんで集金まるく去に　きみ
集金人馴染にされて値切られる　とよ子
集金へ大人の嘘を子に聞かれ　大輪
集金に行って寄附金払わされ　渓水
集金の軽いカバンに気が重い　まさ子
純白の雪に恥らう日の重さ　与史
汚れずに消えて行きたい雪の白　みゆき
雪の朝カラスが黒を主張する　明
雪やけの元気な顔で孫かえる　義孝
吹雪く夜の町は呼吸を止めている　富子
秋支度ゴム手に母の齢が見え　金松
手袋を脱いで手相の灯へしゃがみ　柳志
職安へ急ぐ軍手をあたためる　雀踊子
幸福駅の二人手袋は赤と黒　酔々
手袋の油臭働いている自信　与志
真っ白い日記が聞いてる除夜の鐘　みゆき
除夜の鐘笑いの中で倖を知る　〆女
失意から希望につなぐ除夜の鐘　輝寿
除夜の鐘とうとう貸さぬ家で聞く　喜一郎
除夜の鐘小さい順に寒てしまい　十郎

オーエスケー川柳会　大坂形水報

花一輪有って明るい事務机　博泉
電話口明るい声にホッとする　健坊

振出しへかえりたくない生活だ　一念
雨の日も明るく受ける御結納　岳麓
振出しに決めたはこんな筈でなし　常務
権勢も登り詰めれば孤独有り　栄野生
振出した第二の人生二人連れ　秀川
危険でも保険きらいの一人者　一扇
振出しに戻りましたとまた見合い　亜成
お守りと健康保険を持ち歩き　みどり
振出しの心がまえで今日も出る　青谷
一五〇センチ五〇キロが灰になる保険　聖地
友達のノルマに保険入らされ　元海
洋凧は登る恰好で天に向き　千夢
振り出しは同じライバル先を行く　形水
巣立つ子の支えになっている保険　弥生
保健所の呼び出しで来た母子手帳　入仙
振り出しに戻るに見栄が邪魔をする　好郎

菜の花句会　内海幸生報

ATLAS
アトラス
高級洋菓子・レストラン
本店　洋菓子部TEL (21)2334
レストランTEL (33)9974

昼酒の相手している敗北者　弥生
鬼の面かぶれば仲間が見えてくる　夕花
ハイウェイ追われた蝶は高く舞い　鎮彦
わめくよに喋って切れた赤電話　柳宏子
割り勘になってグループ暇がいり　小松園
合格をしたら表札返えしてや　恒明
泥沼のあひるが夢で舞うている　鬼遊
雪霏々と素足の舞は春日巫子　酔々
札束が舞うと人間馬鹿になる　美幸
舞扇風になったり松になり　鶴声
鬼の瞳に花は花として映り　幸生
初恋のまわりを春の風が舞い　紀美代
夫恋いを静が舞うと罪になる　史葉
金の鬼になって孤独を嚙みしめる　洋子
割り勘の相手はとうに酔いつぶれ　文子
舞い扇サラット開く音が好き　鹿蔵
隠れん坊鬼が見つけた母の嘘　牧人
きれいな音ではならぬ鬼の鈴　雀踊子
峰に舞う雪は国境など知らず　岳人
処世術と言う変身のいる相手　凡九郎

城北明朗句会　川口　弘生報

人生の無駄かも知れない日が暮れる　与呂志
古時計昔の音で今を告げ　満津子
嫁ぐ夜の父の無口が突き刺さる　美幸
夢託す息子は別の夢をもち　百酒
無理言うて言わせて母と娘の平和　弘生
母の客昔語りが長くなり　牧人
一筋の煙りが噂になる恐さ　道子
頼もしい息子になって気を遣い　芳子
結べない隣の帯を頼まれる　小路
弟子に来て難しい事言う大学出　柳信
鉄路錆び思想も枯れた無法スト　右近
頑張って来いと無情な愛のむち　ますえ
ふるさとは無人駅です老母ひとり　正朗
むなしさは自我を徹した八つ当り　太茂津

昔昔ぐらいで子供眠らない　静歩
乱暴をするなと孫の手を握り　炉斉
一着の胸にテープついている　三十四

川柳たまし　稲田　豊作報

足腰も舌も達者で古稀の初春　恵二朗
封を切るあの子の声を聞くように　千翁
旅からの便り切手もしゃべりだす　慶子
初一念貫くねじを巻いている　誠一
合計欄示して妻が笑ってる　克枝
陽が沈む僕の合計まだ出ない　三辛堂
小切手の裏に苦悩の顔が見え　八笑人
山脈を仰ぐ文化に遠く住み　扇水
十字架を仰いで僕の罪裁く　梁水
愚痴縷々と切手が二枚貼ってある　豊作
利息より記念切手の値上げ待つ　よしを
幕引をする子の母は来ていない　林鶴
仮説の街で旅の切手が売り切れる　柳花
キャンセルを待つ空港の大時計　朝二
美しい切手を貼った無心状　皷草
家計簿へ国債買えというテレビ　安静
最初から仲人善意の嘘をつき　静海
配役は舞台を一度通り抜け　筒子
封切った途端に聖徳太子逃げ　鴨平

川柳ささやま　河原みのる報

万有の命太陽エネルギー　近江
産声へ女菩薩の笑むあぶら汗　与志
七十のエネルギー隣りの餅もつき　枝葉
赤旗をたたみエネルギーも蔵い　可住
エネルギー満員電車に吸い取られ　幸禧
明けましてが言えて年玉握らせる　宗珠
明けて辰何やら雲の涌く思い　淡水
孫の顔見に行く今朝の日本晴　とんぼ
うす明り信ずればこそ生きる暗　秀峰
うち明けて臨終の母の安らぎ顔　みのる
幸福な二人一輪ざしきれい　越山

幸福な家の裏にもある悩み　八陣
登りつめ下界の愚痴の馬鹿らしさ　百合子
アルバムへ幸福残して逝った母　千代子

京都塔の会　松川　杜的報

宿の傘雪また降ってまた止んで　求芽
還暦へさあこれからの地図さがす　明代
豆好きと言ったとたんにからかわれ　永楽
十二神将寒の暗さにいきりたち　笛珠
カロリーはモヤシの豆に頼り切り　季賛
テキストの通り黒豆炊けあがり　客遊子
ホステスに次第に遠くなる故郷　王石
最終機星を残して去るしじま　紫香
妥協するつもりの酒が無駄にされ　潮花
釘一本妻の指図で打つ平和　耕三
平手打ち女は女取りもどし　三光
出る杭になって打たれてから悟る　誠史
おふくろの味が煮豆の中に生き　飛鳥
煮豆まだ亡母の味付までいかず　白渓子

佳句地10選（前月号から）

中筋三幸選

神のもの神にかえす火どんど焚き　笛珠
骨抜きにされた日本の平和主義　秋月
忘れろという万策の尽きた悔い　梁水
人目には幸せそうでよしとする　静水
沈むだけ沈めば静かな波の底　薫風
灰になるまで煩悩の火は消えず　香珠夫
倖せな毛皮は美女を抱きかかえ　綾女
遠ざかる悲しい背にある演技　みのる
一矢報いるよりも忘れることにする　克枝
先妻がそしらぬ顔ですれ違い　多久志

平手打ち女の意地が消えてゆく　水客
魚板打って待つ間を古寺の落椿　杜的

井上柳五郎報

川柳後楽

肩書へ無理がのぞいた内祝　鮫虎狼
差し上げた額が恥し内祝　たけ志
内祝らしいと解る笑顔来る　洋之
お見舞の顔に合わせた内祝　勝
脈がある喧嘩わかれのおと仲　元一
脈々と流れる反骨親ゆずり　熙
脈どころおさえているという強み　柳五郎
臨終の脈小刻みに消えてゆき　久米雄
そっと手を握れば愛の脈があり　一声
人脈はたぐらず緩め凧の糸　恒洋
譲られたお古でますます二男坊　廉
世を譲る今宵の酒のちと佗びし　定恵
惜しげなく譲った品に値打が出　佐加恵
譲る気は無いがと値段だけはつけ　照路
譲られた暖簾へ不況の風が吹き　昌吾
月光に夜を譲って陽が沈み　秋月
冗談でしょうと真面目を振りきられ　胡風
期待した真面目な部下に裏切られ　哲郎
譲ること知らぬ男にない妥協　博友

児島与呂志報

川柳大阪

切り干しの味賞め合うて秋深む　季賛
大阪の訛に染って子が帰る　六竜子
落葉焼く煙どこまでぬける空　呑歩利
切っ先へ男胸板張って出る　本蔭棒
切った跡見せる退院近い人　敏
情報もついでに乗せて団地バス　漁人
得々と語る唇虚無におい　徳松
躓ずいた夕べの音を確かめる　笑風
合鍵を預け女の甘い賭　重人
説教に得るものがあり今日も座す　三吉
バス満員善意の席も無視される　眉水
初孫に持って行かれた三ヵ日　洛酔

秋晴れのシャッターチャンスへ雀来る　道子
秋晴れへ新米おじぎしてしまい　喜酔
切り漬けの大根にある秋の味　甫久路
天才と鈍才気が合う黒田節　秀峰
耳もとへ女悪魔となった声　馨二
秋晴れに何処へ急ぐか白い雲　武松
杉木立一直線の冬構え　与呂志

森井菁居報

川柳たけはら

帯しめる日もあるベッド花を活け　不朽
働いた父はたらいて貧しかり　政己
酔うたふりいけるとこまで行ってみる　蘭幸
順番を主張化粧の瓶ずらり　寛子
マドロスに遠いテレビの暮し向き　美佐雄
手を振った未練な俺に腹が立ち　英詩
与うべく愛はあるもの慈善鍋　紫光
病身というハンディに助けられ　酉合
思い出をつなぎ合わせて若返る　かつ子
四才の知恵で私を困らせる　千代美
子供との会話私も四才児　桂子
こんな物溜めてる水屋の小ひきだし　静水
休職のくらし気づかう娘の便り　房子
子とつかる湯舟に今日を満ちたりる　文晴
お下がりもよし二人目も男　笑子
満九才どっきりさせることを聞く　そのみ
いい事が続き人間気がゆるみ　菁居
とうさんに見られたくない日記帖　愛
理性くずして恐いものがない　貞子
貯らないけれどのんびりやってます　一路
逆流へ明日を信じてたじろがず　のばら

和海草春報

堺川柳会

レール保安深夜を稼ぐ職に生き　季賛
男女別わからぬ夜道パンタロン　柳信
明日稼ぐ母娘の夜の走馬灯　千万子
夜の電話ひとり暮しをこわがらせ　宏子
ぼろ儲けそんな仕事で手が廻り　東雲

お願い――　川柳塔社運営部

ご送金は早目にお願いいたします。同人費や雑誌代費が切れると、送本を中止することになっていますのでご協力のほど重ねてお願いいたします。

金儲けと割り切れないから貧に居る　弘生
金儲けせんが先生とおだてられ　一舟
ゆきたいとこあって鎖の伸び縮み　茂美
冬の象鎖を鳴らしたりしない　作二郎
追加した酒でぐっすり寝てしまい　摩天郎
お銚子の追加へマダム目で押え　笑痴
払わない方がビールを追加する　小松園
昇給かと思えば首の切る話　儀一
不景気の空気も吸うて昇る凧　草春
玉の緒の切れるまで添う夫婦仲　徳子
光る玉路傍の石になっている　鎮彦
やめる気の指へ無情に玉が出る　一二三
直感が狂って何も彼もくるい　清女
こんな日の直感憎うなってくる　つき子

金井文秋報

南大阪川柳会

風潮の中で自分を捜してる　凡九郎
風潮の一つに俗化する名所　智子
風潮に負けず老舗は手でこねる　滋雀
風潮に流れず夫に添うくらし　形水
紅葉はやがて散る日へ炎える彩　鎮彦
舞いたくて落葉は風を待っている　文秋
流転にも似てる落葉の散る歩道　儀一
読経に耽り灯に溶ける　喜風
ふけ込んで花の心が憎くなる　君子
二枚目もどうやら入歯動くらし　一舟
父の背のいよいよまろし秋たけぬ　十止庵
マヒの娘へ母の全身ふけて行く　千万子
齢やなあそんな立場もわかりかけ　古方
天皇の立場は一生走らない　小松園

叱る身の立場を知っている素直　一二三
薄倖のシリーズ夫婦で書きかえる　好郎
女シリーズ私がモデルとも思え　あいき
シリーズは悲劇喜劇のセットです　古啓
嬉しい日少年逆立ちしたくなり　肖二
指示以外あれこれ飲んで逆効果　一栄

三井が丘川柳会　高田博泉報

まだ開かぬドアにいら立つ手術室　博泉
焦る程赤信号によく出合い　琴音
焦らない女で針の穴見える　一度
ボーナスの厚さ味わう道すがら　一菁
なにもかも未完成という焦り　亜鈍
地下鉄で走らないのはぼくひとり　古方
政治家のうまい話にない中味　草生
まごころの中身へリボンかけないで　新之助
新しい年へ穂先を整える　亜成
寝正月下駄の歯音も遠ざかり　二松
ハイミスが又ゆううつになる元旦　道浦
新年を迎える鐘に行きつもどりつ　加代子
ボーナスの中身も見ずに買いあさり　てまり
揚げ底で中身はちゃんとかしこまり　柳宏子
子の見合中身で勝負してほしい　公子
新年会四十路の女もすてがたし　正子
三カ日角の小店が忙しい　牧人
正月が間違わず来る養老院　鬼遊

50年度各地柳壇賞決定
―岩本雀踊子氏に輝く

若本多久志選

第3回各地柳壇賞がきまった。50年4月号から51年度3月号までの百二十句を無記名で拝見した。

いずれも題詠ではあるが、こうしてみると雑詠となんら変ったところがないほどの秀吟ぞろいだと思う。

50年度各地柳壇賞

和を願う別れの嘘が美しい　岩本雀踊子

2位以下10位までの佳句

②小っぽけな幸　石けんの香をたたむ　喜美代
②金網の要る窓口に花を活け　扇水
④駅長の帽子の下の顔になる　亜成

焦っては昨日と同じことしてる　薫風

虹川柳倶楽部　新岡回天子報

ピカソの絵ロハであげます幼稚園　五木
北海道へ飛べぬ飛梅飛機の旅　照沖
弁当をふたから食べる明治ッ児　広坊
梅だより祖父母の安否書き添えて　実
梅一輪一輪入試迫って来　岩光
一握の土筆路傍に父母苦笑　朴竜
折詰めの値ぶみしてから箸をつけ　一竿
趣味に生き老の悲しみ忘れたい　春吉
北満のつくしは尺余に伸びつくし　金志郎
ふるさとはまだまだつくしの土手があり　弘子
三カ日礼服だけはたたみかね　勝一
ふくらみを見せて紅梅早春を告げ　紫浪
せがまれて孫とつくしの野に遊ぶ　虹汀
花よりも重たかろうにクジの梅　回天子

西宮北口川柳会　小浜牧人報

たんぽぽの穂わたが夢を乗せて飛ぶ　福松
ひと芝居打って収める元のさや　とし子
ばらばらと拍手場末の芝居小屋　まや子
余生なお一と花咲かす芸を持す　千匹子
泣きついて芝居上手が金を借り　春夫
誘われて芝居へ春を着る着物　三笑子
三面鏡禿の広さがわかり過ぎ　清川

夜廻りの拍子木冬の音で凍る　〆女
野の地蔵枯野を渡る風を聞く　青壺
凍てた路和解の口が見つからず　半歩
胸のうち知られたくない鏡抱く　めぐる
若者の恐るものなし虹を駆け　婦美子
一本の傘でまぎれもなく夫婦　牧人
風花が舞うから女風になる　伊升
アイラブユー嘘でもこんな語が欲しい　絹江

和歌山七面句会　中筋三幸報

土曜日にユーモアがある更衣室　幸
大胆に振舞い孤独に耐えて居る　知也
土曜日に園芸店へ寄る平和　武雄
マニキュアを落して素顔の参観日　寿子
土曜日のアバンチュールへ灯をともす　和美
巫女の爪赤く染まって鈴を振り　光治
大胆だけでもてるニューフェイス　晶子
大胆に女五十の坂を生き　宏康
爪のあか飲めと言われて三代目　勇次
大爪噛んで戸惑う言葉貧し過ぎ　太茂津
大胆に戸棚の魚猫が食べ　豊夫
節くれの妻にマニキュア買ってみる　凡子
大胆な娘を信じている無言　富子
参考人土曜日の足どりを聞かれ　其夕
大胆になって女は腰を据え　多加子
赤い爪聞けば意外な親思い　ふく代
へそくりも大胆になる三年目　三幸

⑤親方に手抜きのことも教えられ　育園
⑥活造りついさっきまで泳がされ　鬼遊
⑦この人に無茶をいわせるイスがある　十止庵
⑧出土品つなげば過去をしゃべり出す　君子
⑨中央に座って波紋の外にいる　修史
⑩便利になったが霊験遠くなり　好郎

本社四月句会

日時　四月七日（水）午後六時
会場　金属会館
南区鰻谷東之町10番地
電話　271・3935番

柳話　戸田古方
（今月の出題・香川酔々）

兼題「満開」西田柳宏子選
「剛情」本多柳志選
「身綺麗」傍島静馬選
「放談」大坂形水選

席題　二題　当日発表　各題三句以内厳守
会費　三百円
★投句だけの方は切手百円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷中之町20
川柳塔社

5月の兼題「焦れる」「一と言」　「柳」「針」

募集

六月号発表（4月15日締切）

川柳塔（10句）若本多久志選
水煙抄（10句）川村好郎選
愛染帖（3句）正本水客選
課題吟（各題5句以内）
「降参」江城修史選
「時間」都倉求芽選
「晴れ間」西垣錦風選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

七月号発表（5月15日締切）

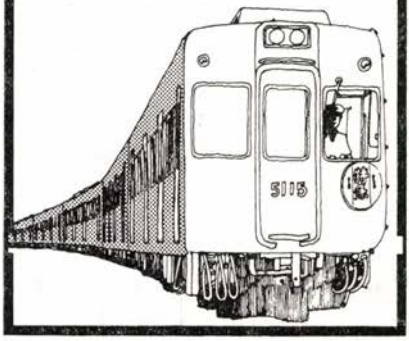
川柳塔（10句）若本多久志選
水煙抄（10句）川村好郎選
愛染帖（3句）正本水客選
課題吟（各題5句以内）
「折り紙」両川洋々選
「中元」清水一保選
「ほおずき」工藤甲吉選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

一人の遅稿　大ぜい困る

定価　三百五十円（送料29円）
半年分　二千二百五十円（送料共）
一年分　四千二百円（送料共）
昭和五十一年三月二十五日印刷
昭和五十一年四月一日発行
編集兼発行人　大阪市南区鰻谷中之町二〇番地　中島蓬太郎
印刷所　東洋印刷製本㈱
郵便番号　542
発行所　大阪市南区鰻谷中之町二〇番地　川柳塔社
電話大阪・二七一―三九八五番
振替口座大阪・三三三六八番

大阪・神戸・京都・宝塚を
最も便利に結ぶ
阪急電車



・ペンペン草・

原稿山積

★せっかくご投稿ねがったものが、毎号発表が遅れ申しわけなく思っています。本来なら〝陽春四月号〟らしい特集のほしいところだが、スペースのやりくりに追われ、どうしようもないのが本音である。だが、経費節減も発展を意味するものと解している。

川柳塔の歌

★3月4日の常任理事会で出席諸氏に見てもらったが、選考委員数氏に一任ということになった。発案者の西尾栞氏を委員長に、しかるべく人選のうえ、再審査にはいることになるが、ぼく個人としては作曲のこともあり、よっぽど慎重にやらねばならないと思っている。

選者交代

★毎年四月号は選者交代になる。この一年間身の細る思いをされるのである。投句用紙は本社柳箋か、本誌と同じ大きさの原稿用紙にお書きねがいたい。まだハガキの方もいるがこちらでそれを柳箋にハリつけているのである。形が小さくて印刷所で落とされることがあるからである。

原稿用紙

★いろんな雑誌の編集をしてきたが、原稿用紙を軽視するのは川柳家だけである。活字と原稿用紙は不可欠のものであることをご承知ないようだ。どんな短いものでも便せんに書かれると、それを一字ずつ数えないと印刷所に回わせないことを知っていただきたい。ついでだが「各地柳壇」の原稿で、そのまま印刷所へわたせるのは〝どんぐり川柳会〟の谷垣史好氏一人である。二十字詰だから、本誌発表のように書くだけのことがなかなか守ってもらえない。一行が二十字詰なのに、二十字以上の句を出されると雑号がはいらない。ご協力ください。

私版・映画五十年史

★放送や新聞、雑誌などで映画の昔ものがたりがブームを呼んでいる。ところが相当にまちがいがそのまま罷り通っているので、この目で見た映画をそのプログラムによって正確な五十年史を残したいと思っていた。そこでそれをどこで発表しようかと、永い間あたためていたが、〝漫才〟誌で活字にすることにした。私版なので範囲はせまいが、まず大正十年の〝常盤座・日活封切場〟のプログラムからペンを起こした。目玉の松ちゃんこと尾上松之助時代である。

（不二田一三夫）

姉妹品大和錦印

九櫻

警察庁・警視庁
全国府県警察
大阪府警察本部
講道館・御指定

柔道衣
剣道具

早川繊維工業株式会社
大阪支店

大阪市天王寺区伶人町29番地の1
電話（779）1690～2番

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和五十一年三月二十五日 印刷
昭和五十一年四月一日 発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻 五八七号

美の殿堂
大和文華館

平城京をめぐる山々を一望の
静かな環境にある大和文華館
は　日本建築の特色に近代美
を生かした美術の殿堂です
収蔵品も日本・中国を中心に
国宝・重要文化財を含む　有
数のコレクションです
観覧時間…10時～17時
▶近鉄奈良線　学園前駅すぐ

近鉄

あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ！

豚　饅
焼　売
焼餃子
豚まんの王様、やき豚入り
叉焼饅

大　阪・なんば
蓬莱
TEL(641)0551～2
551

<出張店> なんば高島屋／虹のまち鹿鳴／心斎橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
京阪テパート／堂島地下センター／中之島サン・ストアー／なんば新川店／奈良近鉄百貨店

川柳塔　四月号

定価　三百五十円（送料二十九円）